

廣告

主筆 田中智學居士

妙宗

送金は帥子王文庫宛鎌倉局振込の事
一月六日「第五編」第一號「既刊」

主筆 加藤文雅

日宗新報

毎月三回(八の日)發行、發行所武藏池上日宗新報社
定價一部金五錢、十八冊(半年分)八十五錢、卅六冊(壹年分)壹圓六十錢、一切前金の事、送金は池上郵便受取所へ振込み、日宗新報主任加藤文雅と御指定の事、一月八日「創立第八百輯」革新第二百廿四輯「既刊」

明治三十年二月十四日(十五日)發行
郵便認可毎月一回(十五日)發行

稟告

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊五錢十二冊前金五十七錢廿四冊前金一圓八錢郵券代用は一割増但五厘切手に限
一講讀申込の節は住所姓名を附書にて認むべし
一爲替は武藏國品川郵便局へ向け御振り込の事
一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿四字詰每一行金七錢なり

明治卅五年一月十五日印刷發行

發行所 東京府荏原郡品川町元南品川四百十二番地
編輯人 本多日生
印刷人 藤崎通明 鈴木障學

發行所 統一團團報部

●主義

一日蓮上人の感誦……………聖應院稿

●旃檀林

一顯本の命……………法如來

●至梵天

一靈海の法話……………信唱院

一調津被害民を救へ……………今成乾園

●別乾坤

一本門の本尊……………本成院

一春何處集……………詩佛會

一和歌數首……………和歌正唱

一漢詩一律……………和歌正唱

●衆妙門

一常樂院日經上人(樓)……………野口義壽

一星光錄……………松尾忍水

●増上縁

一正宗の編纂に謀る……………石渡日毅

●新消息

◎五國布教の記◎古備通信◎千葉縣免因保護事業◎開宗六百五十年紀念事業◎同盤雜誌社及宗文會の會合◎佛記符大説◎本尊抄論文藝叢集に就て◎道場復興◎夏期講義録出版セリ◎別格本山妙立寺方丈の再建◎

廣告數件

第八十二號

行發日五十月二年五十三治明

統一團報

統一團報第八拾二號

(明治三十五年二月十五日發行)

主 義

日蓮上人の慈誨

聖應院稿

目 次

- (1) 悲嘆
- (2) 懐中の靈藥
- (3) 火滅して字存す
- (4) 其迷賊に深し
- (5) 九十五究竟道
- (6) 不孝國
- (7) 六師外道の弟子
- (8) 荖羅樹の花は多けれど果になるは少し

1) 悲嘆
 嗚呼娑婆世界 今の人は地球どのみ呼びて 何等の命
 名をもなさないものを 乃往過去に護人の稱へ出し給

主 義

大乘非佛論者
 百重千重たつ白浪におそろきてもこの水をやすわれにてけむ
 萬法之無寧隔於鐵壁
 草も木もわが身もなへてへたてなくみ法つみ子とわがかうれし
 眞如之林何事於彼我
 外つ國といひくたす。そ現一身のせばき心をさらすなりけり

ひけるにや 論に口惜しきことならずや

オ一堪忍強き人々よ 四千五百萬乃至十四億の同胞よ
 借同す尊等の中 娑婆世界の稱呼に對し 今の變名を
 王張し能ふもの 果してありやなしや

日本全國の富を一人にして持てる君の富豪米國のカー
 ネギーは絶叫して言へり 余にして文學の嗜好と音楽
 の快感とを有せざりせば人生に存在し能はずと 彼も
 亦娑婆世界の稱呼に替成せる一人ならずや

渡良瀬河畔三十萬の民人 飢饉に迫るの嘆聲未だ鎮ま
 らざるに今又八甲田山下に數百の兵士 風雪の裡に埋
 死せるの悲報に接す 豈痛恨の極ならずや

嗚呼娑婆世界 オ一堪忍強き人々よ 尊等は此の悲嘆
 の人生を如何にして送り玉ふぞ 尊等は只語めよき人
 となりて一生を送り玉ふか 或は辛抱強き人となりて

押し通し玉ふにや 同情の念湧き人は語めよき人とな
 り易きも 同情の念に富める者は 理由なく崩壊立た

すしては 心の安まる所以なし 又他人の身の上にて走りしことは諦め易きも 我身に懸りし時は狼狽せざるもの少し 殊に如何程辛抱強き人にては 死魔の舌もて甜めらるゝ時は 嘗て経験なき悲痛に打たるゝは蓋し人間の通性なるべし

余は理義なく誇めよき人となれよと勸むるは 却て同情の念を殺すの邪見にして無法に辛抱強き人となれよと望むも亦一個の偏風に外ならずと思ふ 彼の生兒を壓殺し怙然として貧家の不幸なりと語むるが如き 又彼の五條門が釜入の慘害に遭ふも 濱の砂の一語を語して辛抱強きの類これ等は理義を欠失せる邪定として斷然排斥せざるべからず 然るに世俗に貴む所の賤賤と云ふ剛膽と云ふの類は 徂々この邪見邪定に陥没せり 豈詳めざるべけんや 之を要するに 適當なる宗教に基き人心に一大訓練を施さずんば 人生の悲嘆に對する眞正の安想は來らざるなり凡夫は『斷苦の道

求めず苦を以て苦を捨てんとし 盲瞶にして見る所なければなり』(法華經方便品)

光日房御書(内二十)

人間に生をうけたる者 上下につけて患ひなき人ばなければども 時にあたり人に隨てなげきしなれば也 譬は病の習ひは何れの病も重くなりぬれば 是に過ぎたる病なしと思ふが如し 主のわかれ親のわかれ夫婦のわかれ 何れかおろかなるべき

佐渡御書(内十七)

世間にまざる嘆きだにも出來すれば 劣る嘆きは物ならず 當時の軍に死する人を實不實は置く 幾か悲しかるらん

2) 懐中の靈藥

近時文化の開け行くにも拘はらず 國民の大多數は相卒ひて邪教の網に罹り 滔々として淫祠の迷信都鄙の間に行はる 此は國民が信念に飢へたるの結果にして

所謂他の毒藥を飲み毒の爲めに中てられて心皆顛倒し地に宛轉せるもの(法華經壽量品)にあらずや 彼等は救ひを求めざるにあらず 舌の叫喚の聲は天地に響き渡れり感ひべき彼等は彼等の自身の懐に起死回生の靈藥を所持せることを忘れ居るなり されば先づ彼等に告げざるべからず 汝等は汝等の懐中に無上の靈藥を所持せり 遂に服すべし 病は盡く除かれ愈んと 由來人對には一大迷想を有てり 自己の本体の何たるかを自覺せざるの愚是なり 蠢々として動き 營々として働くも 自己の本体如何を些も領會せざるが故に一頭忽ち迷ひ 一葉炊ち悶ゆ 此に於て乎救ひを四方に求めて 卑淺邪謬の信仰に陥り 所謂狗の作務に狙れて猿を敬んで帝釋と云すが如く 劣等なる崇拜物を奉じ 舌の甚しきは人にして禽獸を尊信するに至る 誠に感むべきの極ならずや 自己の本体は唯物質元素のみの化合なりと思ふは謬想

窮子にあらす長者の子なり貧女にあらす寶藏を有てり
珠照けながら迷へるものなり 懷中に靈藥を所持せり
妙法蓮華の當体 香氣郁郁たり 自覺せよ我は是れ妙
法蓮華の妙体なりと

一念三千法門(外十七)

百千台せたる藥も 口にのまされば病不愈 瘰癧に實
を持てども 開くことを知らずしてかつへ 懷に藥
を持てども 飲んことを知らずして 死するが如し

(3) 火滅して字存す

因果應報の説を目して 兼悟なりと蔑視するものあり
短見も亦甚しと謂ふべし 耶蕪教説く所の末日審判の
如きこと極めて幼き思想の産物にあらすや 彼が説く
末日とは何れの時を指すや 彼は世界の終を云ふなり
世界の終とは何れの時ぞ 世界に終ありとせば無より
造り出されたる世界は復無に歸せざるべからざるにあ
らずや然してこれあり得べからざるの事なり 跡見さ

としてこれ等の俗見を擯し十力四無所畏を得てその説
く所甚深甚深眞實甚深なり『深く罪福の相に達し 還
く十方を照せり』(法華經提婆品)『若し人先より來た種
て罪福あることを信せざる者には 此經を以て之を示
して 種々の方便を設け強て化して信せしめん 經の
威力を以ての故に 其人の信心を發し 欣然として回
するを得ん』(無量義經十功德品)『但當に深く因果
を信じ一實の道を信じて佛は滅し玉はずと知るべし』(

觀音寶經)

立正安國論(内一)

如響 如影 如人夜書火滅字存 三界果報亦復如
是

(4) 其迷 惑に深し

由來佛敎は無神敎なりや 多神散漫敎なりや 多神統
一敎なりや 無量義分裂敎なりや 無量義統一敎なり
や 法佛各別敎なりや 法佛合一敎なりや 須く着眼

迷想到外ならず 縱し假りにこの非理の説に従ひうの
時來ることありとするも うれ迄の長時間に死没せる
無數の人衆は 總べて未決監に収容せられ居るにや
判官の怠慢は如何に 吾人は斯かる長時間の無事に堪
へざるを奈何せん淨土三部經に觀世音の淨土に往生する
もの 十二大劫蓮華中に閉鎖せらるると説けり 好一對
の談柄なり

因果應報の眞意義は法華開顯の妙旨に達ふて始めて光
輝を放てり 佛敎の多くの場合に説ける所は夢中の假
因假果なり 故にうの説殆ど推讓不稽に近し 世人往
々皮相のみに坐して之を嘲笑す 何ぞ知らん如來の
方便知見權實二智の廣大深遠なるは 滿十方台刹弗の
如き智者を集むるも乃し測量すべからざるを 凡夫は
罪福の相を知らず 或は之を自然の運命に歸し 或は
之を神の審判に待ち 或は之を方角に歳星に筮竹に格
へ 思慮昏々として一も正見を得ず 獨り佛陀は茫然

分明なるべし うの無神敎の如く見ゆるは偏眞の空理
を談する一義に過ぎず うの多神散漫敎の如く見ゆる
は誘引の方便のみ 佛敎一貫の本義は實に多神統一の
妙旨に結歸す 本一迹多なり一本の圓像垂迹の上に多
神を現す 一月萬影の如し 体一用多なり 本体は統
一佛なり 應片は無限なり普現色身なり 而して体用
元來無二無別なり 体を全ふして是れ用 用を全ふし
て是れ体 うの用を知て体を知らざるもの 迹に止ま
りて本に登らざるもの 相卒ひて多神散漫の迷坑に陥
落せるなり 八萬四千の敎說種々の方便 其量の義門
畢竟根本の一法より開出せるのみ 譬は一種子より百
千萬を生じ百千萬中一々に復百千萬數を生じ是の如く
展轉して乃至無量なるが如く是の經典も亦復是の如し
一法より百千の義を生じ百千の義の中より一々に復百
千萬數を生じ是の如く展轉して乃至無量無邊の義あり
(無量義經十切徳品)彼の無量義分裂敎の思をなせるも

のは未だ根本の一法を知ざる輩のみ『唯此の一事のみ
實なり餘の二は則ち眞に非ず』法華經方便品』と、若
し能くこの一事實に至らば無量義統一の妙旨を得ん
夫れ法とは何ぞ佛とは何ぞ 二者の体一二なりやと
精研せば法は是れ實相の法 人亦是れ實相の人なり
實相とは何ぞ十界の依正本有常住の當相是なり 法は
是れ一念三千の法 佛も亦是れ一念三千の佛なり 佛
を尋ねて深きに至れば佛は法なり 法を究めて深きに
至れば法は佛なり 法は佛なり佛は法なり 法の外に
佛なく 佛の外に法なし 法は絶待なり 佛も亦絶待
なり 所謂本地難思の妙境妙智の冥合なり 如來秘密
神通之力なり 天人及阿修羅の達せざる所なり 此は
是れ無量義統一の大法と多神統一の本佛との法佛冥合
の妙境界なり 此れ則ち實相なり 實相の外は悉く魔
事なり 嗚呼何と佛教を學びて魔見に隨つるもの多き
や 聖祖はこれ等の魔軍を掃討すべき使命を預けて降

臨し玉へり

立正安國論(内一)

習二辛 夢葉一 忘二鳧 淵一 聞二善言一而思二惡言一
而指二誘者一謂二聖人一 疑二正師一而擬二惡侶一 其迷
賊深 其罪不淺

(5) 九十五究竟道

宇宙法界の眞實相は惟れ一なり 宇宙法界の眞實相を
開發するが爲めに起れる佛陀の説教なれば 一の歸着
の教旨は惟一ならざるべからず 一究竟道を與へて足
れり寧ろ數多の究竟道を容るさんや 餘二則非眞の梵
音聲は佛子の均しく奉戴すべき所なり如來は一切衆生
に吝なくこの一究竟道を施與せんが爲めに來れり
何ぞ計らん佛子擾々紛々として數多の究竟道を争はん
とは 眞言念佛禪律互に究竟道を立つ爾かも自ら數多
の究竟道を容るし 分裂又分裂を加へ曾て一究竟道に
向つて統一的の義軍を起すの意なし豈説れるの甚しき

にあらすや 往昔は波羅門の徒 佛の一究竟道を主張
せらるゝを笑ひ九十五種の究竟道を誇りたりと聞く今
は見る日本の佛教徒 日蓮上人の統一的佛教義を講り
て自ら佛教に 數多の究竟道を主張するを 思ひりき
三千年後の佛徒の見は三千年前佛陀所破の外道の迷見
に同せんとは 余はこの奇なる現象に向つて平然たる
徒輩の多きに驚かざるを得ず 嗚呼日本人の思想も亦
卑ひ哉

佐渡御書(内十七)

外道が云く佛は一究竟道我等は九十五究竟道と云ひ
しが如し

(6) 不考慮

報恩的の觀念は佛教倫理の原則なり 而して佛徒の感
觸すべき瀟恩の源泉は實に佛陀無限の大慈悲心にあり
されば多神散漫の教義を立つるものはうの感觸すべ
き慈悲の源泉を異にし 爲めに不知不諳の間に倫理上

の大罪を犯すに可る うは子として父を知らずんば豈
能く倫理を行ふを得んや 父子の關係なくして孝道あ
るの理なし 子父を知らず 之を人頭鹿と云ふ佛教徒
は定まれる父なきか 混血種か 何ぞ『我も亦これ世
の父諸の苦患を救ふ者なり』法華經壽量品』と教へ玉
へる梵音聲を聞かざるや 無始久遠劫來 世々番々に
出世して我等を救ひ玉へる慈父は 今も現に汝等の頭
上に在りて常に汝等の行道と不行道とを知らしめし玉
ふぞ 諸佛諸天の發願は一にこの統一的の本佛より分
疏せる一教線に過ぎず 三世十方橫豎周遍益物の源泉

たる大慈悲屋は全く慈父釋迦世尊の毎自の一念なり
嗚呼覺者雷聲を聞かず 盲者日光を拜せざるの類か
此に一言注意すべきは佛教に云ふ父とは慈悲の徳を表
し救済の本主を意味するものにして 後の耶毒教に於
ける吾人の色心を造出したうどの説とは天淵の別ある
を領會すべし

曾谷鈔(内廿五)

今ま法に入て二百二十餘年 五濁強盛にして三災頻りに起り 衆見の二濁國中に充滿し 逆誘の二輩四海に散在す 専ら一闡提の輩を仰で 棟梁と特怙み誘法の者を尊重して國師となす 孔子の孝經之を提へて父母の距を打つが如し 釋尊の法華經を口に誦みながら教主に違背す 不孝國は此國也 勝母の國他境に求めし

(7)六師外道の弟子

光陰矢の如し 懈怠の者は佛子にあらず 僧侶が世人より蔑視せられ 隨て佛教の聲價を失墜するに至れるは 蓋し懈怠怠慢にて日月を空過し 徒らに葬祭の閑事に安するもの全く之が一大原因たるなり 思へ我等の祖師は今の修學の時代には如何に刻苦勤勉なりしか又今の活動の生涯に入りては如何に弘教宣傳に勵精なりしかを 我等は文物典章儘はり交通便利開けたる塵中に於て出家學道し 懶惰懈怠にして此等の方等美談を誦するにあらん 當に知るべし 此等は皆是れ今日の諸の異道の輩なり等と云云 此經文を見ん者自身をば耻づべし 今我等が出家して袈裟をかけ懶惰懈怠なるは 是れ佛在世の六師外道が弟子也と佛記し教へり

(8)菴羅樹の花は多けれど果になるは少し

この良強盛の菩提心を起して退轉せしとは 日蓮上人の覺悟にして復我等法孫に教ふる所ならずや 人皆口に信心發き由を申して黙に神に染むるものは千萬人に一人もありがたしとは 上人が有縁の檀越を誦め玉へる誓句なり 宗教の眞き所以は道念の確立に依り凡百の動作を支払するの力あるに存す 士の貴む所は正義を履み發れて悔ひざるにあり 若し士にして氣節なくんば劍にして鋭ならず花にして香なきが如し 誰か之を敬せんや况や佛子にして道益なくんば士の氣節を天へ

代に生れ幸にして身を佛門に投じ衆生救済の聖職に就けり回思せば五百塵點劫來未だ曾て試みざる無上の榮譽を擔へるなり 人天の導師なり世間の眼なり 衆生の眞善智識なり 大良福田なり 救處 護處 大依止處なり 船師 大船師なり 今の兩肩に荷負する所豈復至重至大ならずや 且思へ我祖は我等に願として雄大なる教令を下せることを 曰く若黨ども二陣三陣に續ひて迦葉阿難にも勝れ 天台傳教にも超へよかしと 柳も迦葉阿難の生涯は如何にありしぞ 又天台傳教の清國は如何にありしぞ 我等にしてこれ等先聖古賢に超勝せんとせば 豈に懈怠懶惰にして可ならんや 眞に奮勵刻苦して寸陰たも徒消すべからず 記聽せよ 怠慢徒食の輩は 六師外道の弟子にして斷じて佛子にあらざることを

佐渡御書(内十七)

般泥洹經に云く當來の世假りに袈裟を被て 我法の

極野殿御返事(外八)

と儲む所なし 隨の極也 醜の極也 魚の子は多けれども 魚と成は少なく 菴羅樹の花は多くさけども果に成は少し 人も皆此の如く 菩提心を起す人は多けれども退せずして實の道に入る者は少し 都て凡夫の菩提心は多く惡縁にたぶらかされ事にふれて移り易き物なり 鐘を著たる兵者は多けれども戰に恐をなやるは少きが如し (已下續出)

旃 壇 林

●顯本の命

活 如 來

轉迷開悟と云へば一般佛教徒のキマリ文句であるが、今の迷とは如何に悟とは如何にと問へば何と對へるであらう 恐くば迷とは煩惱なり悟とは菩提なりと眞面

目に云ふのかしら、併し夫れは悟とは悟なり迷とは迷なりと云ふのと同轍で、只異つた文字を書いたに過ぎないのであるらんなどてどうして末法の凡夫連に満足出来やう筈はない、イザ活如來の活説法と聽かせてやらう須らく隨喜の涙を用意しておくがよろしい、巳の尊きとを信するが悟の始で、巳を卑しむのは迷の始である。平等海中には清波濁波ないが如く、無念無想には迷悟生佛の相場はないのである、されど心法は活物の妙事であつて、必ず一念涌起して活動を中止しなひのである、其の一念活動の右を向くと左を向くのか、迷悟の別るゝ處となるのである、即ち唯我獨尊の一念を涌き出づれば活如來となる、之に反對すれば死凡夫となる。自己の尊きを説かない宗教は未即實眞の方便である、うんな宗教を信するのは他人の實を數ふるが如しで、無明縁起に葬られて居るのだ、先づ宗教心の發展を考へても了解が出来やう、外界萬象の生

方に彌陀ありと見て唱名念佛に浮身をやつし、東方に藥師如來ありと説けば南無藥師如來と願ひ出し、ヤレ大日如來ヤレ不動明王とからもうわけもなくうろたへ廻る、ヨシンバ左様の佛があるとしても、自己の尊き所以を忘れて頭を下けるのは、佛の僕婢とならんと云ふのの難難節である、三世十方の佛の功德を説たのは、釋尊夫れ自身の唯我獨尊を説示する化導の方便布教の廣告である、うの釋尊とても天竺に生れて苦行を積んで成佛した新米の佛であるのみならば、有爲の報佛夢中の境界で我不歸焉である、南無佛をやつた處か矢引愚と云ふものである、この新佛を顯本して三世常住の本佛を拜することが取要である、この本佛は吾人を見し、吾人は本佛を信へて、生佛一如と云ふ一大事因縁があるのだ、久遠の本佛は自己の尊形なり、本佛を拜するは其當相我身を拜するのである不輕菩薩の非ノを食を禮拜せられたも其理由である、凡夫を顯本す

起次第が研究の届ぬところよりして、風の神、火の神水の神、山の神など、云ふ無明の怪物が出来たのが多神教である、更に無明が凝結して宇宙萬象の第一原因があるとの思想が、造物主と云ふものゝ出来て耶蘇教となつた、併し神が造物主であると思ふのは顛倒の妄見で、人間無明と云ふ怪物間屋が製造したのである、夫れを耶蘇教徒杯が天帝は眞の神で、多神教は偽の神である杯と云て居るのは、五十歩を以て百歩を笑ふよりも可笑ことである、基督が云た己れの目に棟梁あるを知らずして他人の目の塵芥を批評する勿れとの金言に反省して貰ひたいのである、時間は無始無終、空聞は無際無限、諸法は實相と極つて居るのだ、夫れを豆粒の様な智慧で觀念工風をこらし、牽強附會の理屈で悅んで居るのが學士や博士の淺幕な、丁箇と云ふものじや、活如來の慈眼實に氣の毒に堪へぬのである、又多くの佛教徒と自稱する連中も不惑なものである、西

れば即久遠の本佛である、自我得佛來の我が一應經相門より云へば天竺の釋尊であるが、觀心門より云へば吾人を顯本したる我である、この我が無作三身の覺体であるのだ、觀心本尊の眞理も此處である、先師が五百塵點劫來の業障も一刹那に縮めると云はれたも例して知るべしだ、自己の尊き所以を一念喚起すると無始已來の夢がさめて頓て本佛が顯はれるのである、この不可思議不何言説の眞理に慈悲を合めて、汝等凡夫を濟度せんが爲の大秘法と南無妙法蓮華經と申のである、この妙法蓮華經は本佛の魂で、本佛の活動は皆妙法の活潑である、本佛の智慧慈悲光明徹上徹下妙法の力用である、この妙法は又自己の尊形の本体である、妙法其體が本佛、其體が自己の信念である、妙法に負くものは自己の眞面目を汚がし墮落して下界に旅行するのである、自分で自分の實とするのである、是が無明縁起に展轉する煩惱である迷である、念佛無

問等の格言も自己を捨てる馬鹿もの、自業自得を誦める慈悲の涙である、妙法を信するものは東風の眞價値を現はし、進歩して常住の淨土に行軍するのである、自分で所持したる無上寶珠を利用するのであるこれが總て佛界縁起に活動する菩提である悟である、如來か三世十方を説かれたのも、要するに汝等の一念に唯我獨尊の血脈を紹續する方法手段に外ならずである、斯の如き大悟の信念に安心立命するものこそ、願本の命を得たる恩徳利益である、天下の名僧高德大博士達諸君々々善思一念之

合字以敬心の心を

本立院日誓

手を合せ拜む心も崇めよや

本より尊き我身なりせば

るべし此人は佛の功徳を具して、諸惡亦く滅して佛慧より生ずるなり

エー只今讀み上げた通り、我々や諸君が諸惡の罪障を消滅して、さうして、法身、報身、應身と申す、身徳と智徳と慈悲徳との三身の功徳を、少しも不揃のないようには具へて居る。佛様の境界にならうとするには。

「懺悔」といふことが第一の前提であります。恰度物に譬て見ると、我等が旅行をするようなもので、私めの歩み出しを間違へると、後等旅行をしようが、件々目的地へは往けない、これを「一步のあやまち千里のたがひ」と云ふのだが、佛法の修行も矢張さうだ、最初

の一念發起が間違て居ると萬行徒施だ。信心の道は種々ある。だが「懺悔心」が起行の初歩でこの心得がないものは、佛子の、法子のやれ信者のやれ行者の、シノゴノ言ふ權利はない………ここ

「懺悔」も小乗やら、大乘やら、大乗やら、若は達門、若は本門、

至梵天

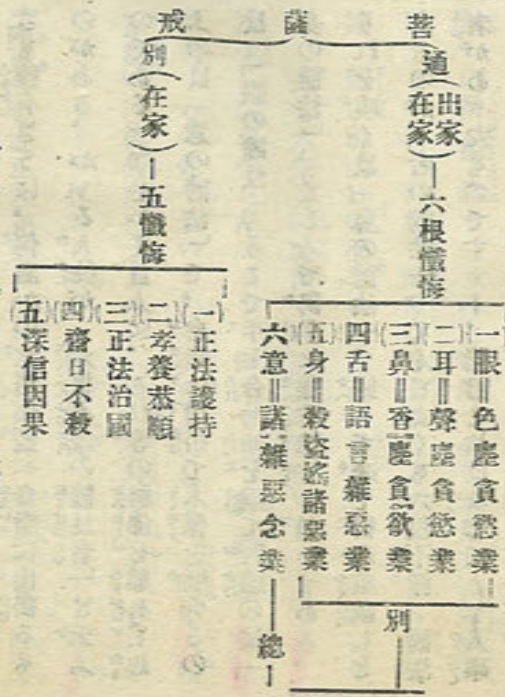
懺悔の法話

信唱院 說教

損智の或地方道教の明り、台家の五悔を在家の法門に開會して述べたことある。ところが自取りの都合で「懺悔」と「懺悔」と「懺悔」との三ツは説いたが「回向」の二ツは丸で手を付けた。ツた、するに關する内で、環りの分を是非に之湯仰された、そこで今度此願報をかりて補足する事になつた。

まづ朗讀いたします。法華の結經、觀音賢經に云く佛阿難に告げ、佛滅度の後、佛の諸の弟子、もし惡不善業を懺悔することあらば、相違に大乘經典を誦讀すべし、此方等經は是れ諸佛の眼なり、諸佛は是に因て五眼を具することを得給へり、佛の三種の身は方等より生ず、是れ大法印にして涅槃海を印す、此の如き海中より能く三種の佛の清淨の身は生ず、此三種の身は人天の福田、應供の中の最なりこれ大乘方等經典を誦讀することあらば、當に知

いろ／＼の解釋があるが、拙者は日蓮聖祖の流義で噴をして見るから、其都盛で聞て貰ひたい、一休この經文は懺悔滅罪法を明したもので、全部菩薩戒である、其内「在家出家に通ずる部分と、在家の優婆塞戒のみの部分とがある。一寸黑板へ書いて見よう、



マ一ツツと斯様なつて居る、ネウこで台家では「通戒」の六根懺悔法によつて、「五悔」(懺悔、動靜、隨)を立て

、さうして又之を「理懺悔」、「事懺悔」に分けて居る。眼、耳、鼻、舌、身の五根懺悔を事懺悔と爲し、意根懺悔を理懺悔としてある。別戒の五懺悔に就てはなんとも言てない、これは別にお咄しする都盛だが今は先當り通戒の六根懺悔に就て「五懺」の法話をいたします。

「眼」で見ること、「耳」で聞くこと、「鼻」で嗅ぐこと「舌」で舌舐ること、「身」で行ふこと、「意」で思ふことだが、大体「誦法」であつたとして、懺悔してかゝるのが第一で、さう後悔すると同時に自今而後は、「眼」では誦法の色臭は見まい、「耳」では誦法の聲身を聴くまい、「鼻」では誦法の香塵を嗅ぐまい、「舌」では誦法の談論說話をしまし、「身」では誦法の動作をしまし「意」では誦法の悪事を思ふまい、さうして「六根悉く正法に改良して清淨無垢にしよう」と心掛けてゆくのが「六根懺悔」と云ふものである。諸君の内に妙法に背い

四月二十八日には大懺悔會を開て、六根の誦法を清りにやならぬ、拙僧はうの準備にもと思て、モ一少し懺悔談しをやるから、強乎として聞いて呉れ給へ、六根懺悔の方法に就て五種ある、これを「懺悔」「勸請」「隨喜」「廻向」「發願」と云ひます、第一の懺悔は總体に互るから、これまで、御預りとして、第二の勸請から咄しとするとしよう。

「勸請」とは諸佛諸菩薩諸天善神等の來臨影向を請願て置く懺悔法である、我々の固質は佛の留守や神の監視に間に、誦法難惡と働いて、澤山慾張仕事をして置くと云ふ横着者であつて、件々油斷もすさもならぬ惡漢である、だから獨立獨行に放任て置ては行末闍魔法王の御厄介になるのが果報だ、そこで正法正義の諸天善神を監視の御役に願んで、無事に感應増進ようにして貰うのである、ところで佛と云ひ、菩薩と云ひ、神と云ひ、あまりに澤山あるので、何誰の御方を何様に御

て居る處の阿彌陀や、藥師や、又は不動だの、觀音だの、若はずつと下つて清正公、鬼子母神、稻荷などをさも難有さうに、何處かの堂塔伽藍へ參詣に出掛るものがある、かゝる人物が「六根不淨の誦法者」と云ふのである、なせかと言ふに、これ等の神佛を難有と思ふのは「意の誦法」で、參詣に出掛て木像を瞻仰るのは「眼の誦法」、ところで禪堂に線香抹香が焚いてある、それを嗅ぐは「鼻の誦法」、歸つて來て御利益談しをするのが「舌の誦法」、なんともよくも六根不淨、誦法者があつたものですナ、諸君これは決して「人事ではないぞ、「日本國は誦法なり。日蓮が弟子檀那は正法なり」と宗祖上人は仰つた、が今では法華宗までが誦法の方人をして居るではないか、なんと諸君な言けない始末では……………アー泣て居つては道話が出来ない、諸君本年は開宗六百五十年に相當するので

頼みしたら宜いのか、仲々我々凡夫には分別が出来ない、うれや、これやを御察し下さつて「勸請法」を御制定になつたのが、釋迦如來の「塔中別付」の法門で、これを日本國に御引通なされたのが宗祖上人の「本門の本尊」の儀式である、これが「空虛會上儼然未散」の勸請法で、それを拜禮で有形無形共に六根懺悔するのが、勸請懺悔法の上乗なるものである別勸請、雜亂勸請は似而非の勸請法で頗るわるいのみならず、却て六根を不淨にする誦法の惡作でありますさうだ少しはわかつたかネ、何んでも、別勸請、雜亂勸請、その他一切のものを御廢止にして「本門の大漫茶經」に御改宗召さるるのが「勸請懺悔の骨子」である……………うれから次は「隨喜懺悔」……………
「隨喜」とは正法正義の振舞を見たら、僧侶でも、信徒でも隨喜賛成せよとの懺悔法である、さうも我々には善くない癖性がある、他人が正法正義の爲に善根を積

むじ、フンあれかと言つて、あどは悪口難言出放題と来る。頭から「嫉」んでかゝる。この「嫉善根性」が眼にも、耳にも、鼻にも、舌にも、身にも、意にも、浸出るので、六根悉く不淨誇法となる、甚だ見晴がな、うこで此妄想外見を退治するには、「隨喜懺悔」でゆかねばならぬが、諸君もしも之に類するような経験があつたら、**「懺悔」**、**「罪障消滅」**が肝心要目、……

『廻向』とは善善萬行悉く菩提に仕向るのを廻向懺悔法と云ふのだ、さう云ものか我々共にはネー諸君、エー偉い毒を喰ば置まてどか云、極善ない體菌が居る、して此腐敗根性が、六根を汚穢して平然に誇法惡徳を遂行して誇負然するので、ナニ地獄極樂……うんなものがあつて堪るものか、うの證據に見ろ、古往今來、地獄極樂から何人も美書一牧郵送つたものがあるまい、惡事は仕得た、善事は仕得た、あんなり野暮なことは

得て、頼りも倒高く置つて居るお安くない高慢僧があるかのような類天狗達の持病を療治してやる者婆羅吉の良藥が「發願懺悔法」である。なんでも自分も安穩なれ他人も進運するようにと、自他俱安同歸寂寂を發心すると同時に之を破てはならぬ誓願と決定て、六根不淨の不潔動物を、一團淨提の内は一匹も愚癡く蠢動して居ないように、天下の誇法を大慈折伏するのが、「發願懺悔」の活動である、これを實地に活現には、僧俗が異体同心にならねば駄目だ、僧侶が資前の通り、寺院に安閑坐食をして、檀家誇法者の鼻毛を算用居つてはいけぬで、また信後もさうだ、年忌法事や盆春の附届ぐらゐで、外護の能事了れり、など、オッソー濟まして居つてはならぬ、マー、喧嘩も成敗だ、いまだの處は懺悔々々大懺悔で一切取消として、サー、新規巻直し!!!僧は宗廟の通り、開山の通り、經師の通

言ふまいぞ、全体明治時代を何んぞ心へ居る、先んずれば人を制するだ、黃金主義で甘い汁を吸ふのが勝よし神や佛があつた處がま、よ我等の手先さに慾張信仰までだなど、言つて平氣で居るものがある、諸君マ、こんな我利、亡者があるから、善因善果、惡因惡果の説教が入用なので、萬事萬端菩提へ仕向けの出来な、いような、誇法惡業をばししないで、はやく求菩提の心に立邊つて、最正覺を自得するように注意せよと云ふのが「廻向懺悔」の眼目だ。……次は「發願懺悔」……

『發願』とは佛法修行の心得は自分の成佛を發心ると同時に一切衆生をも成佛させたい者と誓願を立つるが發願懺悔である、元來凡夫の持病は自分が幸福なれば、他人は何様ならうとも自分は關係ない、ウンあれかわれは自業自得のよ、ア、誰れをか恨んやだ、など、濟まし込んで居る自利主義博士がある、自分次が悟道を

信徒は四發金吾の通り、日出山又次郎の通り、三輪志摩守の通り……

● 鑛毒被害民を救へ

今成乾隨說教

旅は道連れ世は情けと云ふて、旅行するに道づれよりたよりになるものはなひ、夫れと同じくこの世の中のものも月日の旅行をするには、前會同情の念は喜しきとはない、この同情の念を孔子は仁と説き、孟子は惻隱の心なきは人に非ずと云ひ、基督は愛と説き、爾が敵を愛するものは神に教はれんと云ふて居る、佛陀は慈悲を説き、佛心とは大慈悲心なりと示し、經に今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子、而今此處多諸患難、唯我一人能爲救護と云ひ、又我亦爲世父救諸苦患者と仰せられ、宗祖は日本國の一切衆生の異の若は悉

是れ日蓮一人の苦と仰られてある開祖は「門に立ち物乞ふ人の聲さかば哀れと思へ施さずとも」と誄じられたのである、苟も人天の導師を以て任じ所會救済を以て目的とする僧侶及び之に従ふ信徒は、同情慈悲の念がなければ偽宗教家である。喜捨の志なきものは偽信徒である、慈悲喜捨の四無量心は佛弟子の欠くべからざるものと思ふ。

予は蠲毒問題を耳にせることは十年前からである、さうながらこれは政治家の書力すべきものと思ふて居たが、昨年末貴族院尹前にて、田中正造翁の陛下に直訴せりとの飛電に接して恐惶に堪へなかつたのである。實に耳聾心とはこの事である、爾后去月某日佛徒が東京錦輝館で救済演説を開し際、予も學生諸氏と共に傍聴に出懸たのである、これで其の被害地の惨状を聽て同情に堪へないので、學生と共に歸途銭湯温湯や磁摩手を買ふべき金を皆義損したのである。當時田中正

るべからず、我は是れ如來の使なり、如來に遣はされて如來事を行するものなりと、そこで田中翁も亦被害民を救助するは、自己一人の天職なりとの確信より發したる言だと信するので、予の平生の所信と相符合するを以て思はず大聲を發したのである。予は百聞一見に如すとの考から、被害地を視察せんと決心を生し、一月十九日午前十時四十分發の演車で被害地に向つたのである。乗車中藤岡町竹澤清次と云ふ被害民に會して予の志を述べた處が、全氏は自宅に一泊せられよと懇請せられた、そこで予もその氣になり充分其の状況と探究せんとしたのである、さて愈被害激甚地たる谷中村海老瀬村等を見ましたが、實に其の惨状は形容の出來ぬのである、諸君は新聞紙上で御承知のとなれば、敢て説明する必要もない予は三人の案内者に依頼して田中翁の妻君に面會して、種々被害地の様子を聞いたのである、妻君は昨夜死に類せる朝

造翁は、謹慎の身であるにもかゝはらず、謝辭として數十分陳べられたが予は今日迄幾千の演説を聞たが田中翁の談話は感ぜられたとはない、翁は其の熱心至誠言々皆血であつて一舉一動何を以てか被害民を救はんとの觀念より外ないのである、予は實に偉大なる明治の宗吾であると思ふた、翁は演説中被害民の救助せられざるは全く吾志の足らざる罪なりと云た、當時一般の聴衆は皆ノーノーと叫だが、予は一人ヒヤヒヤと思はず大聲を發したのである、予が一般の人と正反對の批評を下したのは、田中翁の身口意の三業實に佛の化身か如來の權者かどまて感ぜられたからである、予は嘗て宗教家の覺悟として左の言を陳べたことがある、我は無佛世界に生れたるものにして、一切衆生の心田に佛種を下すべき大責任を有す、若し同教徒ありて布教に盡力するものありとせば、我がなすべき産業を補佐するものなれば、感謝の意を表するの覺悟な

民を見舞しに、斯の如き食物を發見せりとて、キビの皮小麦のフスマ杯にて丸めたる物を示された、予も其の食物の意外なるに驚き、紀念として貰つて來た。予は種々の感に打たれて同情の念に堪へないので、其夜宿泊すべき凡ての費用を同夫人に呈して至急窮民を救ひ給へと涙を拂て分れたのである、夫人は年老ひとり且樂ども、品性正しき故か宛がら觀音の化身の様に思はれたのである、案内者杯が田中翁及び夫人に對して昔の君臣の如き懸隔あるかと思像せしに、極めて平民的にて母子の様に見受たのである、其談話はチヨト芝居で見た宗旨と百姓との様に感ぜられたのである、予は夫人の健全にて何處迄も翁を補け、被害民を救済せられたしとの言を残して別たのである。予は藤岡町迄行て一泊し、更に諸方を一周せんとの予想であつたが、惨状を見聞するに隨ひ、精神に益々舌痛を感じ、一步も進む勇氣なく、特に黄昏には成て來

るし〇なきこと故反て人に救助せられなければならぬ
 恐あり、且つ一時も早く道友及び知己に同情の念を喚
 起すに如すと決心し歸京したのである。
 處が其翌日田中勝子の名を以て、予に左のはがきが來
 た

謹啓此程中は御遠路御觀察に相成其上貴重金の圓造
 御惠與御降難有奉厚謝候就ては自今尙一層御盡力の
 候と偏に奉願上候、先は御禮まで余は何れ拜顔の
 御萬々可申上候 (二月廿一日)

極めて僅少なる微志に對して、斯の如き禮狀に接し實
 に慚愧に堪へないのである

予は一月廿八日開祖の御命日自房にて救助演説をして
 救助箱を置いたら同情の信徒が應分の義捐をしてくれ
 たから、實に感謝に思ふのである

願くば佛陀の慈悲を感じ、宗開兩祖の精神に感ずるも
 のは、應分の救助せられたいと思ふのである、被害民を
 一天兩乘の程に高擧する正當節も斯たのである、志士
 仁人早く彼の被害民を救へ、是子の切に望む處である

夏期講演集最後の數式訂正

- 自己の信位＝知恩報恩
- 自己＋無限＝知恩報恩＋無限＝信位家の道徳
- 自己＋有限＝知恩報恩＋有限＝非信位家の道徳

●本門の本尊

本成院説教

凡う佛法に於きましましては、戒律の中に不謗三寶戒と申
 して、佛法僧の三の寶は尊敬すべきものであると定め
 てある、これ故何れの宗旨でも、必ず三寶と云ふもの
 を尊敬してをります、聖徳太子の十七憲法の中にも、
 「篤く三寶を敬へ」と申されてある、三寶とは佛寶法
 寶僧寶の三つであるが、此三寶には種々の差別がある
 佛寶には本佛述佛等、法寶には大乘小乗權教實教
 等、僧寶には本化迹化等と澤山に分れて居る、其澤山

救ふのは即自行の大善提心である、一點も慈悲の念を
 生ぜざるものは、實に佛陀の教訓に負くのみならず、
 外道にも劣る人非人である、慈悲の充實せるは是れ佛
 陀にして、皆無なるは地獄界である、喜捨の念は是れ
 菩薩の淨業にして、皆無なるは餓鬼である
 或人は云ふであらう、彼等は謗法者なれば施さるも
 よろしと、何と誤れるの甚だしき、もしこれを謗法と
 すれば日蓮聖人の兩請をせられたのは謗法か、佛陀の
 本事に窮民を助けられたるは罪惡か、赤子の井の中に
 陥らんとするを傍觀するは人道か、先づ生前を盡んじ
 て而して後に没後を助けんとするは聖訓は顛倒か、四恩中
 一切衆生の恩は佛陀の虚説か、豈斯の如き理あらんや
 である
 燒芋の欲望を割て同情を寄するの學生あるも、大腹高
 樓に千金を投するの紳士は如何に、ア、世はさかさま
 になりたればこそ

の三寶を一々残らず尊敬すると云ふことは到底吾々の
 出來得ることではない、然らぬ何うしたならば能い
 何う云ふ風に信仰したならば、佛様の思召に叶ふので
 あるかと云ふに、吾宗祖日蓮大聖人は吾々が聊かの苦
 勞無くして、而も澤山ある三寶様を滅さず信仰の出來
 る様に教へて下されてあります

宗祖聖人は「本門の本尊」と云ふものをお書願になつ
 ておる、此御本尊の中には、一切の法も、一切の佛
 様も、一切の僧寶も皆揃ふて居る、此本尊を信仰さへ
 すれば、法界中の三寶様を一つも残らず信仰し尊敬す
 ることが出来るのである、其譯を少しお話しを致しま
 す、

此本尊と申しますは、天竺の語で、此方では、輪圓具
 足、又は功德聚と翻譯致します輪圓具足とは此本尊の
 中には、一切萬法皆具足して些も缺けた所がないと云
 ふ事功德聚とは此本尊の中には世の中のあらゆる功德

即す御利益が集つて居ると云ふ事でもちらも此御本尊一つで満足である、外に求めなくとも宜いと云ふことである、それで此本門の本尊の中で三寶と申しまするは、中央の御題目が法寶、釋迦多寶の二佛が佛寶、上行無邊等の菩薩已下凡てが僧寶でありませす、一切の法寶は皆御題目に攝し、一切の佛寶は釋尊に攝し、一切の僧寶は上行菩薩等に攝めらるゝのである、今一々に就て攝まつておると云ふことを少々お断し致しませす、

第一に法寶、法と云ふことは「道」「道理」或は「真理」とも云ふことで、人々が守つて行き踐み行ふて行く道を云ふのである、うの人々の守らねばならぬ道踐み行はねばならぬ道と云ふものは、一や二ではない儒道の仁義五常も道である、外道にも夫々道がある佛敎には八萬四千もあるが、うの澤山の道は皆が本當の道ではない、其の澤山の中に何か一つ本當の大道と云

目抄

ひ、乃至、一千七十六部五千四百八十八卷四百八十帙、是れ皆法華經の經の一字の眷屬の修多羅也(法華題目抄)
華嚴阿含等の四十餘年の經々、小乘經の題目には大乘經の功徳を收めず、實經には又往生を説く、諸經の題目には成佛の功徳を攝せず、又玉有りとも王が中の王たる經無きなり、乃至、今法華經は四十餘年の諸經を一經に收めて、十方世間の三身圓滿の諸佛をわつめ釋迦佛の分身と説する故に、一佛一切佛にして妙法の二字に諸佛皆收まれり、故に妙法蓮華經の五字を唱ふる功徳莫大也、諸經諸佛の題目は法華經の所開なり、妙法は能開となると知つて法華經の題目を唱ふべし、(唱法華題目抄)

と申されてゐるのは法華經に皆納つて居ることを言はれたのでありませす、佛法の中の澤山な道は皆是法華經の一乘の道を説き分けたるので、佛様が凡夫をして此

ふものがあるに違ひない、うの大道からいろゝの小道が分れたものである、うれ故に小道を捨て、大道を取ることを考へねばならぬのである、其大道とは何である、釋迦牟尼佛が法華經の方便品の中に「十方佛土の中には唯一乘の法のみ有つて二も無し亦三も無し、又、唯此一事のみ實なり餘の二は則ち眞に非ず、又、一切諸の世尊は皆一乘の道を説き給ふ」

とお説きなされませした、此は道と云ふものは澤山にあつても、唯此一乘の道計りが眞實の道である、外の澤山な道は眞實の道ではないと、れ説きになつたのでありませす、一乘の道とは即ち「南無妙法蓮華經」である此妙法蓮華經は一切萬法の根本大道であつて、此中に一切の法が攝つて居る、御妙判に

先づ妙法蓮華經の五字に一切の法を納むることを云は、經の一字は諸經の中の王也、一切の諸經を收一乘の道に入らしめんが爲り、其手引として佛様の善巧方便で、種々の道即ち法門を説かれたのである、これを法華經の方便品中に

切の濁亂の時は衆生の垢重く塵食城妬にして、諸の不善根を成就するが故に、諸佛方便の力を以て、一乘に於て分別して三と説く

とある、此御經文で法華經より前の御經は皆佛様の方便の説であると云ふことが明である、うれ故に、無量義經に

方便の力を以て四十餘年には未だ眞實を顯はさす」と御説きになつた、四十餘年とは法華經より以前の御經を云ふたのである、斯様に佛様がれ説きに成つて居れば、爾前の御經は法華經の眞理の一部分づゝを説きわらはしたものであつて、完全なる道でない、法華經ばかりが眞實であると云ふことがお分りであらうと思ふ、ううすれば小道たる諸經よりは、大道たる法華

經、即ち南無妙法蓮華經のお題目の方が難有い法である。根本の法であること云ふことが分るのであらふ、澤山ある法寶の中で、此お題目が一番根本の法寶であるから、我宗では此御題目を御本尊として尊拜するのであります。

次に又此法華經の御題目は、諸佛所師の妙法と申して一切の佛様は此御題目を師匠として、悟をお開きに相成りました。法華經の結經の觀普賢經の中に

此方等經は是れ諸佛の眼なり、諸佛是に因りて五眼を具することを得給へり、佛三種の身は方等より生ず。

と申されてある、方等經と云ふは法華經を指したのである。五眼と云ふは、悟の眼で悟れば五つの働きある眼を得るから、此に五眼を得たと云ふは、悟を開いたと云ふことで三種の身とは佛様の身体である、つまり一切の佛様は此法華經で悟を開く事が出来たと云ふの

別 乾 坤

春 何 處 集

詩 佛 會

山根編輯長貴下

文學なき國民は死したる國民也。二千五百年の壽命を有せる日本は、何に依て其大を致したるか「古事記」「日本書紀」に顯れたる吾等が祖先の詩想は、如何に豪放にして朴素ならずや、如何に遠大にして沈著ならずや、而してこの詩想を有したる國民と其子孫が、奈良時代を造り、平安時代を造り、鎌倉時代を造り、室町時代を造り、徳川時代を造り、而して終に明治時代を造りたる事を知らば、文學に宿せる思想感情が如何に後時代の國民を奮起せしめしかを了せん

あ、將に起らんとせる吾日蓮上人の宗教は、果して何物を有せるぞ、健全なる信仰は今何處にか存せる、其象なる事業は誰人の手に依て行はれつゝありや、彼等の問題とはパンの問題也、彼等の戀愛とは肉と意味せしめ也、彼等の名譽とは或る椅子によりてピンヘットを

である、一切の佛様が此法を信じて佛様に成られたから、我々も此御題目を信仰して、佛に成るのである御妙法に

佛は子なり、法華經は父母なり、譬へは一人の父母に千子あつて、一人の父母を讃歎すれば千子悦ぶ爲す、一人の父母を供養すれば千人を供養するに成ぬ

法華經を供養する人は、十方の佛菩薩を供養すると同じとなり、十方の諸佛は妙の一字より生じ給へる故なり (千日尼御前御書)

又、法華經は釋尊の父母諸佛の眼目也、釋迦大日總じて三世十方の諸佛は法華經より出生し給へり、故に今は能生を以て本尊とするなり、

と申されてある、斯様な譯の御題目なれば、此題目を諸法の根本とし本尊として信仰するのであります、次に佛寶の事を御斯致す筈であるが、あまりに長くならずから、次回に申し述べます。(已下次號)

吹かす事也、彼等の愉快とは淺草奥山の安樂理屋に正宗の三四本も倒したる事を意味する也、人生と其裏面宗教家と其内幕、吾等は最早多くを言はざるべし社會はかくして宗教家に向て多くの敬禮を拂ひ、神の使を以て呼びつゝある也、あ、滑稽は悲惨を意味す、悲惨を極めたる今の状態は豈に滑稽ならずとせむや、吾日蓮上人は「熱」の癡りたる也、「信」の癡りたる也、上人に文學なしといふ勿れ、此「信」と此「熱」とはやがて上人が大なる文學にあらざるや、彼等の布教は何程まで實蹟をあげたるか、然り彼等の布教は彼等か力を盡すまでに相當する實蹟はあがらざる也、むべ「信」と「熱」との文學的要素は彼等に認め得ざる也

將に起らんとせる日蓮上人の宗教に、上人自身か傳へたる文學を有せしめよ、而して吾等が布教師をして少しく新らしき血を湧かさしめよ、更に何物かを感せしめよ、信仰に死するの死をして文學に活かさしめよ、文學に死せるの死をして信仰に活かさしめよ、而して吾日蓮上人の宗教をして長へに完全なる域に導かん (上田不語)

さはいへど終には赤き花に泣かひ破れ袴に太刀はく君
罪の子となりて終らむ吾なるを君がなさけのあまりに
あつし
るれどだに君が心を知りもせば一夜をなきて別れしも
のと
うれゆへに御經ひもどく吾なるを紅送り給ふ君がやさ
しさ

大慈悲の姿は何かあゝうれよ茲に劍もちてたつ男あり

(此六首ふしん生)

六十あまり一になりける春よめる

ゆ た か

としたちてこよみはもとにかへれども

かしらの霜はゆきどかはれり

百年の童子といへることの葉を

今う我身につみしられける

月々紅一俗に庚申蓋と云ふ

春あさのけちりもわかつて月ごとに

くれなるにはふ花の一もど

衆 妙 門

不惜 常樂院日經上人

前號の續

在總本山 野 口 義 禪 稿

尾張布教

慶長十三年夏教を尾張に布く、州を擧げて信伏歸仰す
茲に法然黨の善導寺等大に上人を憎み、其徒數百人を
疎かし一日上人の法席に乱入し、問答を望むと揚言し
惡口狼籍至らざるなし、上人曰く法門の事惡口狼籍に
決すべきものにあらず、宜しく法論の格式に隨て理非
を決すべしと、翌日廿三條の詰問狀と并に問答格式を
書して送る

問答格式

一 從昔天竺大唐我朝三國共に宗論の格式の事

衆 妙 門

をりにふれたる

時なれや門邊にさはくうなるまで

ことわけつらん世とはなりぬる

いかさまに實をやひすはむかにかくに

ことはの花のうつくしの世や

同窓會の成立をきいて

雪はたるかさあつめつゝたまあへる

友とちつとひかたるたぬしと

明治卅五年壹月廿三日、第八師團歩兵第五聯隊試於
雪中行軍八甲田山、生憎天候險惡忽逢大風雪、燒背
囊燃銃器以取暖、雖然降雪強風數日未止、於茲乎燃
材全盡糧食亦乏進退維谷矣。空使二百餘名將校士卒
凍死於雪中、其悲慘不可言、因有此作

北溟散吏 稻 葉 正 唱

八甲田山霧火時。六花盈丈勢難支。糧空一夜先裝凍。體
冷孤軍己手龜。遠望絕無霜月照。寒威更有雪風吹。函
餘將卒終埋沒。聞此天災誰不悲。

一 御拾便の事

一 廣く諸經論を辨へたる經緯の事

一 判者八問答に四種の格式八種の格式十二種の格式

取辨へたる人たるべし

一 記録者從兩方能出事但文字ある才智の人なり

一 私語人作不可用事

前々より法門に詰り以三人一まぎれ話を申は皆宗
論の法長に背き申候天下第一統の御世に候間 此度
の問答未代迄高麗南蠻迄も廣まり申すべき記録た
るべく候間三國法度のごとくに被仰付可被下候
慶長十三年戊申十月三日

常樂院 日 經 判

御奉行所

二十三箇條

- 一 妄語墮獄
- 二 背主八逆罪
- 三 依非還俗
- 四 非理惡口墮在奈落

- 五 十四誹謗隨在無間
- 六 世義兼法達遺蹟
- 七 三部經無得道
- 八 法華總文違背遺蹟
- 九 依經對機得悟違背
- 十 雜捨建立祖師違逆
- 十一 雜捨建立法華違背
- 十二 法華隨他暫開定散
- 十三 隨自後法然遺蹟
- 十四 正直捨權慈捨台文
- 十五 唱題勸化又認必然
- 十六 題名受持得道設誠
- 十七 觀經法華前後迷謬
- 十八 科段失天古違背
- 十九 釋迦違背佛敎廢獄
- 二十 漸頓分經經無得
- 廿一 涅槃得道法華餘殘
- 廿二 身土說機欠問問味
- 廿三 法然誘法誘人自記 (以上)

遺の詰問狀を受けたる淨土一派の徒輩大に狼狽し、近江美濃尾張遠江等數國の學匠等寄集り、評議を凝す。雖も終に一論條だも正格に返答する能はず、却て卑汚なる言行に及ぶのみ。上人の狀に「熱田にては人數を催はし我等を打果さんとし清須にては其趣に候」とあれば、彼等の爲に屢々窘蹙せられたることは、疑な

格の真相に近づけるを觀るべし、否、眞に消息中に云へるが如くなりせば、同博士の如きは既に上人が主義の人となれるものと見て可ならんか、何はともあれ博士の手に於て斯かることゝ書かれたるを、予は同志諸君に紹介するをよろこぶもの也

(前略)鎌倉に住へる縁に何か土地に關する一著述試み度思へども、例の古跡の討究は鎌倉志八卷と新編相模風土記百二十五卷にて盡きたり、何かうれ以外の著述もやと思念罷在、日蓮上人の追懐に勵まされて、過日本來其傳記并に高祖遺文錄など繕き居候が。さて是の偉人の生涯こそ今更貴くも仰かれ候ものかな、心も言葉も中々に及ばず候、上人の人物は其教義を味はでは解し難ぬるふしありとさる先輩の勧めにより、法華經をも讀み申候しが、げに方便善量二品の本義なくては日蓮上人一代の大信仰大抱負も其根底を失へるに同じきこと覺東なくも合點致候ぬ、げに遺文を讀まむものは先づ彼の經を讀むべきにて候べし、遺文中の開目抄、種々御振舞抄などは申すに及ばず、其他の消息文みな、上人の傳記に對照して與會難盡、文學として見るも上人の人物其儘の大發現、げに、鎌倉時代第一の偉觀とや申

二十八
し、然れども佛天の加護する所ありて、幸に身命を免れたれば彼等念々無念に堪へず、茲に一大好策をこる金でけれ、今佛者善導寺等人をして行て江府に詔へしむ、其言に曰く「頃日法華の僧常樂院日經なるもの専ら邪法を弘め念佛者は阿鼻墮獄信者は畜虫に劣ると若りに時俗を迷はして吾宗を塞く」と、事東照公に聞す、東照公大に怒り「我亦身修の門に入るもの豈此誹を受けんや其者を召し必ず事を決せん」と、人をして上人を駿府に召す (未完)

星光錄

松尾忍水

一高山博士と譽世の學風稍異域に入らんとするにつけ、日蓮上人に對する批評、觀察、研究、信念は俱に共に其真相に接近せんとはせり、是前に時勢の然らしむるものなるが、文學博士高山林次郎氏が姉崎嘲風に寄せし消息一通(三十四年十二月發行太陽第七卷第十四號)の如きは、竟に同博士が上人の主義と云ふべき、三上氏等の日本文學史に一語も言ひ及ばざりしは如何にといふべし、君の意見如何、云云

尙文中、上人其儘にも似通ひたる語を挾みて、前後の文字を連鎖せるあり
所詮は矛盾の人身を受けて此末法の世に人となりぬ大覺世尊だに四十余年末顯眞實を宣らせ給ひて、法華爾前の經典をば一妄語に附し給ひぬるものを、いかに況や性淺く果乏しき吾等如きに於てをや、云云
此他、開目抄の我義智者に破られずば用るじと也の前後の數句を併せ摘載し、以て开が文を結べり、殊に又與ありげに讀まれたるは、上人其儘の口調ありし是也「是ればた小生に於て素より存知の旨也」とは可笑からずや
二日本原野の逍遙 某所より二四日經つての歸途、作州津山の山名師の弘通所を訪ふた、すると師は予に告げて、影山君(予が親友石川謙二君が昨臘同國勝田郡の素封家影山家へ養子したのである)が君の來たのを聞かて、是非會ひたいと云つて、昨夜まで都合三日も滞在して居たのだから、どうも君が歸らないから、俟ちあぐんで今朝歸つたとの事を云ふ、それで師の机の上二首の和歌が遺してあつた

焦れにし君を待つ間の久しさに

法のはなしを聞きし嬉しさ

まつ君に逢はで歸るのほひなさは

またの逢瀬のたのしさと

どうも予は其本意に背いたのだ、一つは久し振りに會つて見たいのだ、これから影山君の勝加茂村まで、幾ら里程があるだらうかと懸くと、二里半内外であるから往復の人力車を雇つたなら、岡山上り終列車の間に合ふたらうとのこと、さらばと云ふので車を走したが、てうど其時が午後の一時であつた、大急であつたら二時半頃には影山の宅へ着いた、石川君の影山は大嬉ひで是非今日は泊つて呉れる、何を談をせんにも談の順序を失ふてしまつた、されば一時間二時間二人の談話はつくづくも思はれぬ、是非に〜と言はるゝので自分もよく考へて見れば語るべきとも、さて何事よらせんかと思ふほどである、では其通りにと急ぎの中なれど泊るとに定めたので、

何事を語らんものと思へども

まつふさかるは胸にうありける

と取敢ず示したら、影山君は予に左の一詩を返した、

奈岐山の雪にも牙えし心から

傍に給仕の下婢は朋友の中のよいは兄弟よりも嬉し
いと見へますなど微笑した程であつた。

懸雲兄と筆の運の序なれば希望して置きたいのは、程
遠からぬ津山の山名氏は信仰ある宗學者であるから、
ふるつて法話を聴かれんとを祈るのである。(終りに高山
氏の消息又のある大隅を示さねたる君の好意に謝す)

増 互 縁

● 一宗の編素に謀る

石 渡 日 毅

私は一宗の諸先輩并に一宗の志士横信に折入て御相談
申し度ひ事がある、其は外でもない興學布教の二件で
ありますが、此事は本宗當路の人を夙に策を立て、進
路を取り、實行せられつゝあることは信じて疑はない
所ですが、なれどまた安堵が出来ないから不敏をも省
みず敢て喃々するのである、御存の通り興學と布教と
は偏癡すべからずして、寧ろ併行すべきもの否密着不
離の關係を持て居るので、之が前後輕重を論ずれば無
論興學を前に重きを置きます、何となれば興學のなき
布教は田植に臨んで苗のなき様なもので、又病人に對

わが庵訪ひし君を嬉しき

奈岐山と云ふのは作因に跨れる名山で、山陽道では第
一の高山である、それから有名な日本原野に連れて行
て呉れまいかと云つた處、ツイ十四五丁だから案内し
やうと云ふので宅を出た、日本原野は那須野に次いだ
だ奈岐山の山麓から南へさして開て居る、恰も其時に
雪は霏々紛々として下り、寒氣は耳も落ちんばかりで
あつたが、趣味は非常に深かつた。

雪紛々更に興ある野中かな

吹雪をば雨曼茶羅華や法ばなし

と斯う予は謳つたので、君は直ぐと口を開いて

常盤にもあらぬ二人が野原にて

雪を友とし語る中かな

と謳つたのだから、君はさうだ和歌になるかねと云つて
ハッハッハッと笑つたが、予はとに角に信仰上を立脚
とせる二人の談話が愉快で〜でたまらなかつたので
ある、陽も西に落ちたので急ぎ足で宅に歸つたが、其
夜晩餐の膳上温情ある交杯の談話は又一入の快味を感
じた、君は予を勉めて宴とは安ら行く日ねもす飲ひの
を意味して居るから心ゆる〜とやつて呉れると云ふ

して君護の親切のみありて醫藥なきが如く軍人が勇氣
のみありて武術も不案内軍器糧食も欠亡せるが如き光
景であつて決して賞めた咄であるまいそれで本宗今日
の状態はどうです此類ではあるまい歎、私は憶ふ布教
の方は各宗より大に進歩せると同時に、比較的興學の
方が退歩の傾向あるやに見受ます、噫亦厄矣哉である
地跡宗門に學者が多かれは恰も國に軍備が整ふたと同
じで、軍備充實の時は畢竟戰爭はしないでも、威信全
く至り輕侮自ら去るじや、是故に舊幕の當時諸藩各々
文武の士を撫育して其藩場とした、城廓如何に高く登
ゆるも文武の良材なきは識見なき藩主と云ふべきじや
決して具眼の殿様とは云へぬ、鶴島開典や池田新太郎
公や水戸の威公及義公近くは板倉松奥の諸公、皆茲に
深く鑑み大に備へたる人々である、流石後世から高く
呼ばれる値打がある、宗門も亦此通じや、されど時世
後のの宗教に興學々々を云ふてもうれば駄目だ、尤で
五六十の年寄に學問を弄むると同じで使ふ間がない
本宗の如き時機相應の宗教家が目を覺すべき時じやと
云ふのである、煎じ粕の藥は幾何煎しても功はない、
本宗の如きは比較的大に振興して、外侮も受けず布教
興學共進歩しつゝある様だが、まだ〜廣き世間の方

から云へば一年生にも行かぬ、何處かに天保鐵の臭味
がある様じや、是では逆も廣く闊浮の衆生を化益する
事は出来ぬ

自解佛乘の御歴々でさへ、苦修練行の功に開發して見
せぬば信じない世の中、靈習力のある方々でも、精勵
勉強の縁に依らぬはならぬと云ふ、況や無教育無素養
無學無識丸で無の字盡しの大先生達が、どうして度生
利物が出来よう、御互の者は維新前後の生れだから昔
も知らず今も識らずと云ふて済されるが、後進の士は
仲々夫では此會社が通れぬ、此頃學校生徒の咄を聞た
が一方の云ふに、家へ歸ると「寺の坊さんがお出の時
はお辭儀をするのだぞ」と云はれるが、おれはイヤヒ
や、ナセツテあの坊様はまた郵便の切手が讀みんのだ
もの、「ブランド」が好きと云ふから其を出すと前
若酒じやないと云ふのナ、「ブドウ」と「プラダイ」が
別々の様なものにお辭儀をするのは已れはイヤヒや、
と斯ふ云ふと相手の兒童が云ふに、已れの處に來る坊
様も何も識らぬけれど、死んだらあの入に葬て貰ふか
ら、お辭儀をしてやつて置のヤと答へた、どうです誠
に閉口の外なしでしょう、此調子で年月を経ようもの
なら、反て彼等に教化されて大事の法華經の威信が保

又物には本末あり事に始終輕重ありで、學林を隆昌な
らしむるは物の本、事の重きものであつて、伽藍堂塔
の宏壯紫衣金襴の美裝も、學林の重きに比ぶれば何で
もない、世間文武の道に於ても其例は澤山ある天地を
經緯し禍亂を克定するは是れ其大なるもの、書を讀み
文を作り劍を働かし矛を振ふは是れ其小なるものであ
る大法漣海僧道不振は法の大きなもの、空塔破壊衣枯
袍破は其小なるものである、而るに其小なる者に汲々
として其大なるものに冷々たるは、本末輕重を認れる
顛到の甚しきものと云はねばならぬ、惠澄堯山の二哲
は流石に茲に見るありて自ら好んで小地貧院に通れ以
て育英に身を委ねた其本末輕重に明らかなる他山の石
として學ばねばならぬ、傳道の法子法孫あるときは其
宗貧小と雖も、富且隆と謂つべし、
不肖は確く信じます、與學は素養布教は事業であると
果して然らば、事業より素養は決して生せず素養より
事業を産む事を熟考して貰ひだひ、養素なき人何ぞ事
業が出来ましょう、曇雪の善楚を経て始て人天導師の
資格が出来るのでしよう、願くは一宗の先輩志士種信
諸君、妙法廣布の金言を事實たらしめんとするには少
くとも百名以上の生徒を學林に常在せしむべく學林の

ての事にならう、普通の事理さへ明らかならぬ坊さん
が、理の一念三千事の一念三千も有たものではなから
う、尤も告朔餼羊と云ふ事もあるから、名義丈でも口
碑に傳へて置けばまだしもと思へば思ふもの、實に
嘆はしい事ではないか、

斯る小兒に向て説法すべき將來の龍象を、宗内寺數の
割から論ずれば學林在學生少くとも百名以上不斷に教
育せねば、今日の現狀すら保維する事は難からう、況
や廣分流布は期すべからずだ、どうぞ一番深慮遠謀百
年の大計を願ひたい、勿論學林は能化の師を出すの義
林である、高僧を養ふの深淵である、所謂小林に象を
出さず淺淵は龍を生せずであるから、可成丈其林を大
にし其淵を深ふせざるべからず、一宗の名士願くば茲
に鑑み玉はんことを希望する、
凡る事は超逸せざるべからず技藝に於ても工業に於て
も醫業に於ても皆然りだ況や高遠の學術殊に甚深微妙
の宗教に於ておやだ、苟も超逸せざれば自立難は且つ
難し、況や人を教へ世を濟ふ事を得んやだ、世の宗教
に衣食するもの卑々として落はす活々として自ら喜び
反て常に世上の嗤笑となれるもの豈亦悲しらずやであ
る、

基礎を建て、欲しいのである、其方法手段としては予
亦多少の建築ありで、期を得て再び筆にしましようが
なに決して難事にあらずで、一宗の事業としては極め
て容易の事で、ううして天下後世に大教を廣布するの
決案が獲られ様と思ひます

新 消 息

●盛岡布教の記

田邊善知手記

余は初めて東北の地に布教の旅を爲しぬ、時は十一
月二十日の午前十時四十分、上野發の日鉄に乗込み、
なんの風景もなき上州野州の田畑枯野を眺めつゝ、う
の夜の十時に福島着、すぐ停車場前の旅館「上安」に投
じて一泊を爲しぬ、この家の女中某は二本松の生れに
て、本宗の蓮華寺本久寺の過去を現在のことどもを語
り、福島の日蓮宗が例の通り新羅教略の欺網にかゝり
冥福的迷信の外法華宗の仕事なしとの模様を探り得て
圖らずも慨嘆の太息を吐き、晚酌を傾け按摩をとり、
旅装をおさめ睡に就きしは、十二時強なりしと覺ゆて

の日の地に初雪のありしを聞く。

二十一日朝六時福島を發し、長岡を経て桑折を過ぐるの頃朝暾東天に昇りて、鮮かなる彼れの笑顔は滿面善色を湛へて、昨夜の初雪に美人の化粧をなせる、いと耻し氣なる西山の花嫁を迎ふるに出遣ひ、しばし觀覽の榮を享く、天然の美觀廳裏に仰して、今猶忘れ難き思ひせらる車中山形縣宮内町の警油酒味嗜醴釀造家漆山龜太郎氏に會し、佛教の振はざるを啣ち合ひ、余は「本尊論」一語を授け再會を約して大河原にて別る。うれより、仙台、一ノ關を通過して盛岡に著せしは午後四時、余は直に梳車を驅て市外北山の法華寺に赴く寺主渡邊元教師倉皇として出迎の不準備を陳謝せらるされど余は送迎の儀式をあまりに仰々敷する舊佛教徒の貴族主義を惡むや久し、余は余の奉ずる日蓮聖祖の徳迄も平民主義の弘經家たるを知る、ために此行をなすに先ち數々着盛の日と時間の照會あるに對し、二十一日若どのみ報じ置きてうの前日に突然乗込を執行したるなれ、然るにこれが却て同地信徒の感を惹き、聲益に先ツて形益の勝縁とならんとは、余の豫想せざる處なりき。

二十一日は盛岡の十月十二日にて宗祖御會式の侍夜日と稱せし一編宗と全佛宗との強折伏「日蓮宗の鬼子母神崇拜」「稻荷崇拜」「清正公崇拜」、祖師崇拜の大打撃「關浮統一の本尊は壽量顯本の大漫茶羅に限る」と論結降壇せしは一時三十分、席に他宗の僧俗數多ありしも黙噤口さながら水をし打ちしに似たり。

二十三日は宗祖正當御會式のこととて、三百餘の檀徒さきを競ふての參詣、正午より一時三十分間の法樂、午後二時より『上野抄』の聖訓に依り「一代經と法華經の關係」「法華經と壽量品關係」「壽量品と題目の關係」「諸佛諸神と釋迦如來の關係」「釋尊と題目の關係」「讀經の弊」「別勸諸難雜勸諸の害」題目正行の眞意義寺内の鬼子母神堂稻荷堂を破却するは佛祖に忠誠なる所以」等を懸示して午後五時演了

△二十四日は飯去の心組なりしも、顯本攝信徒の懸望辭しがたく一日の日延となり、午前以信院に伊保内老師を訪ひ、宗義改正に付き懸談、午後一時より五時迄演説、この日は「初心成佛抄」の「三事相應」の文を拜讀して「寺院と檀家の關係」「導師と信徒の關係」「五種懺悔」を詳述して、内省的修道の緊要なるを勸説したれば、隨喜の深にかきくれたるものも往々にして之れあり、眞に感慨無限なりきこの夜宮田元治君の信仰

朝來檀家信徒の集ひ來りて何矣となく、まめくしき起ち居のはたらし、いと殊勝にう覺へける、午後一時現任渡邊師の導師、老師伊保内日海僧都も列席にて一座の法供養あり、午後二時余は「主君抄」の「法華經壽量品は釋迦如來の壽命の功德に當て候」の文と「本門戒体抄」の「本門の十重禁戒」の文とを拜讀して「生命財産の貴重すべき所以」「佛とは不老不死常住不滅の義にして彼の死滅主義にあらざる理由」「佛教諸宗の死滅主義及び一般寺院の堂塔佛欄を葬式法事等のみに使用し來れる誤想」を痛撃し、更に論旨を進め本門專常住の妙旨を叩き「立止安國の大義」「發達即寂光の遠奧」を説て「生々主義の活信仰」を鼓吹したるは、近頃以て愉快のことにてぞありける、かくて退座せしは午後六時、四時間の長談義しかも一人の倦色なし、信力の度合推知するに足る。

●同夜七時より演説會を開き、盛岡顯正會員中村藤助君外二三名の辨士ともく演了、余は八時頃開口十間奥行八間の本堂に立錫の餘地なき滿堂の聽衆に迎へられ、心懸敷壇場へのばり「本尊論」の題にて「本尊問答抄」の「本尊は勝レタルヲ可用」の文意を論旨と爲し「基督教の聖神説、天國主義の誓願一盛岡市の救護經歷談を聴く、氏も好僧の信徒、益々改善を加へなば盛岡法華の一重鎮たるを失はず、乞ふ君努めよかし、至囑同夜中村金田等の顯本攝一同より種々厚遇を受け彼の地の名産「南部鐵瓶」等の土産物にあづかるこれもまた聞法謝恩の致す處歟

二十五日、夜來の降雪滿目の銀世界、思はず快哉を連呼し、朝餐もうこくくに済まして、渡邊師金田氏の案内に雪景の散策と出掛け、同地有名なる石割櫻を始め櫻山神社の兜石の他市中の其處此處となく見物して法華寺惣代人細越和吉氏方へ立寄り、盛岡固有の響應を受け同氏所藏の珍品化石製の硯一基供養にあづかり壹ト先づ法華寺へ歸り、午後五時渡邊師、中村藤助君金田岩吉君、等五三のものに送られ停車場へ赴きしに前以て見送りの謝絶爲し置きしにも拘はらず、左の諸氏前後して集り來る、雪ふり、道あしく、而も夜に入り往復甚だ便ならざるに、予の行を送られける、深信朴素感するにあまらずあり、姓名を記して聊か芳志に答ふ

八森さだ、島川なみ、池田くに、佐々木竹、阿部秀三、江柄元、上野みき、細越和吉、大坊勸藏、佐々木岩太郎、原野外梅田金吾

午前十時上野若無事歸京するを得たり

▲盛岡布教中所感十則を得たり、今その一二を略記せば一、中村藤助金田岩吉二氏の熱心、中村氏は司法部の官吏、顯本構及顯正會の主唱者、會は青年の團體、宗教倫理の研究を目的と爲す構は純信仰家の糾合、宗風發揚を主義と爲し、布教基金の方法採既に成熟す、余の滯在中終始よく斡旋の勞を採る、金田氏は中村氏と兄たり弟たるの人、顯本構の今日あるは同氏の苦心經營與て力ありと聞く、實にや余の在盛中法華寺に常在して巨細意を置めての盡碎感するの外なし、(二)島川常磨君の死去、君は中村君と莫逆の友、顯正會の創立に奔走して同地の銀行員數十名を擁護したりと聞く、面して余と相知るに至りしは、本年相州龍口に於ける夏期講習會に始まる、今回余の布教を待ちこがれ、殆んど臨終の間際までうのこを口すさみにしたりと實母なみ女の物語り、斷腸の思ひに堪へざりき、君年二十九十月十二日溘焉逝く嗚呼惜哉、三、宗教改正の困難、老僧の頑迷、權徒の妄信、感情の衝突、諸種の事狀が纏綿して宗教改正の梵行を防ぐ、うの間に處して改正を企て革新を行はんには、「阿責」「驅遣」「擧處」の嚴訓を身讀するの覺悟を要す、盛岡法華改正の難事今猶こ

て散會せり、時に午後八時

▲篤信會初會演説、毎月一回當地本行寺に於て催せる篤信會演説は其初會を客月十六日午後六時より同寺に於て開會せり、來聽者凡三百、例の如く新聞廣告辻ヒラ等、準備員の奔走致さるしを以て盛會なるを得たり、此日の演題及弁士は(宇宙大の宗旨)松尾英四郎君(佛教と忠孝)山名木信師(迷信の罪惡を述へて信仰の確立を論ず)能仁事一師にして辨士各獨特の辨をふるい午後十時閉會せり

▲津山信徒と倫理研究會、津山町山名木信師は當地の倫理研究會に頗る賛意を表せられ、時々研究問題を送付せられつゝあるが、同地信徒にも同様の論議を爲さしめん方針なる由に通報ありたり、尙ほ和氣町本宗信徒吉岡氏等も吉田師と共に時々出席せんとの通知ありたれば、將來更に面目を加ふなるべし、

●千葉縣の免囚保護事業

千葉縣監獄教誨師能仁講明師よりの近信に同縣免囚保護事業の過去及現在を見るに足るべき、左記の報告書を得たれば、全文を其儘掲載する事とはなしぬ、本院の事業は去る明治二十九年中縣下二三有志の間

の教語を要す、努めよや邊邊師、突貫せよ南部の師子兒、四揮毫の個請、中村君等顯本構員が紀念の爲り余に揮毫を頼請して止まざりしには流石に開口、さりとてその儘すわり往生も出來ず、我流の針文字を無暗矢鏝に書付けてよう、虎口を免る、末代の布教には書畫のたしなみも時に或は必要なるを感せにき、その他盛岡教界の觀察に就き余の論策なきにあらす今はこれを省く(完) 此稿編輯の都合ありて掲載差引誤り心してよ

●吉備通信

岡山久城多吉報

▲倫理研究會新年會、當地顯本法華宗青年信徒發起となりて團結せる倫理研究會は毎月五、十、の日を以て會合せるが、集るものは信者あり、神主あり、異教者あり、新聞記者あり、銀行員あり、商人あり、職工あり、然れども本宗信徒の豫て牛耳をとれるることなれば、所謂世間内より信徒を誘引せんとするの下心に外ならず、而して内山下の同會場に於て盛なる初會を催したり、會するもの三十余名、午後三時開會第一着席、次に能仁會長の音頭にて、陛下の萬歳を三唱し、次に松尾記録係の報告、次に予は祝文を朗讀し、次に討議及講演あり、終つて幹部を配付し各自快談興隆の

に計畫せられたるも當時機運熟せずして設立の運に至らず在再日を曠ふせる中翌三十年一月一般因徒に對し減刑の恩典を與へられ一時多數の放免者を出すことあるに際會し益々其設備の急なるを認めたるを以て千葉町所在寺院及有志相謀り先つ成田山新勝寺に就きて金一百圓の寄附を受け以て被保護者收容家屋の賃借並に日用品供給の途を開き當時機運に迫れるもの十八名を收容して救養保護のことに着手し以て事業の端を開けり而も當時直接斯業に當るべき適任者を得ざりしと經費支給の困難なりしとに因り遂に事業の完成を見るに至らず是に於てか撤を禁して縣下各宗寺院の贊助を得全年六月中千葉町寒川に於て各宗寺院の協議會を開き規則の編成出資の方法等事業維持の方案を議し尋て三十一年四月規則を改定し案を具して縣廳の認許を得茲に始めて本院の設立を見るに至れり爾來院則の規定に基き金品の寄附を勸募する所ありしと雖も時恰も物價昂騰財界恐慌の厄運に遭遇し兼て直接監督の任に當れる者の本地を去れるに會し爲めに一時資金の募集を見合せたるを以て延て豫約寄附金の實行をも得ざるに至り財政上言ふべからざるの困難を招致し將に事業の閉止を見

んどしたるも平ふして之が維持を力め卅二年一月に至り千葉町所在寺院の協議を以て本縣監獄教誨師に院務の主任を委ね鋭意事業の遂行を企圖したるも擴張整備の方案は常に資金の薄少に妨げられ已むなく眼前少許の經營に甘じ亦大成をみる能はざりしは實に縣下慈善事業の爲め甚だ遺憾とする所なり願ふに社會犯罪の現象は斯業の擴張を促して亦現況に安ずるを容さず是を以て今回各宗當路諸師の會合を求め事業擴張の方案を議せしに幸に贊同を得別紙の議決を見るに至りたるを以て自今該議決の主旨を体し廣く世の慈善家に訴へ斯業の擴張方法を講せんとす今や本事業の命脈は一に繫て縣下慈善家の向背と寺院諸師の贊否とに在りて存す請ふ同情を寄與して本院の趣旨を贊し以て罪犯撲滅の舉をして盛ならしめんことを謹て白す

保護院

千葉縣保護院

(所 在)

千葉縣千葉郡千葉町

(設立者)

千葉縣各宗寺院及有志者

(出資ノ方法)

一 基本金ヲ募集シ得ルマデハ縣下各宗寺院に於テ毎年金六百圓宛三ヶ年間贈出スルモノトス
 一 基本金ハ一萬圓(基本金額)ニ充ツルマデ規則ニ基キ之ヲ募集ス

假建築出資方法

一 縣下三千寺院ニ於テ平均貳拾錢宛本年度中ニ贈出スルモノトス

保護ノ旨義方法ノ概略

一 保護ノ旨義ハ千葉縣監獄ノ放免囚ニシテ身体壯健善行ノ望ミアルモ住居ナク産業ナキモノニ家族的ノ待遇ヲ以テ善後ノ保護ヲ與ヘ自營ヲ期スルニアリ保護ノ方法ハ院内ニ起臥セシメ或ハ日雇稼業或ハ院内ニ於テ工業ヲ爲サシメ得ル所ノ工錢ハ實費ヲ扣除スルノ外之ヲ貯蓄シ以テ自營ノ資トナサシメ而シテ他ノ一面ニハ每週一回以上教誨ヲ施シ又本人ノ志願ニ依リ夜間修學ヲ爲サシムル等ニアリ

設立已來收容者ノ成績

一 設立已來收容者ノ成績ハ左ノ如シ
 一 本院ノ目的ヲ達シ保護シタルモノ 貳拾四名

内

- 現今工業ニ從事シアル者 拾一名
- 全 商業ニ從事シアル者 四名
- 全 雜業ニ從事シアル者 九名
- 一 親族故舊ニ交付シタル者 六名
- 一 在院中脱走シタル者 十二名
- 一 現 今 在 院 者 七名

院長役員左ノ如シ

千葉縣山武郡源村布田

藥王寺住職

院長 中 田 日 章

監獄教誨師 大 津 隆 岳

全 能 仁 壽 明

全 尾 崎 雅 喬

千葉所在寺院 村 松 泰 隆

全 井 上 快 念

會計監査員

千葉縣香取郡觀福寺屋職

保 波 快 念

千葉郡生實濱野村本行寺住職

長 谷 川 日 濟

保護院ノ名稱ハ實驗上被保護者ノ感情ニ關スルノ嫌アルヲ以テ自今左ノ如ク改稱ス

(免 保護院事) 千 葉 縣 福 田 院

開宗六百五十年紀念事業

▲大懇親會 前號に掲載せし如く、去月廿八日江東井生村樓に於ける聖祖門下大懇親會は、準備萬端殘る限なく行届き、樓下の各室を各休憩所事務室に宛て、定刻より一同樓上の會場に着席せるもの、來賓席に二十餘名、一般會員席二百五十餘名、發起人を合せて無慮三百餘名とぞ注せられき、さて午後一時半に至り發起人惣代加藤又雅師の開會の辭に次て、會員惣代小嶋傳次郎氏の祝辭、來賓協田本多兩僧正の演說、祝詞祝電の代讀來會者芳名の紹介等畢りて、紀念大會方案協定に移り滿場一致協田僧正を坐長に推薦、僧正承諾就席左の方案を配布したり

開宗第六百五十年紀念大會方案

- 一、四月二十八日東京ニ於テ紀念式ヲ舉行ス
- 二、四月二十日二十八日ノ兩日東京ニ大演說會ヲ開ク
- 三、四月二十一日ヨリ七日間東京ニ大舉傳道街頭演

説及ビ施本布教ヲ行フ

四、四月二十九日全國宗門篤信ノ士ヲ東京ニ招集シテ左ノ事項ヲ協議シ實行ヲ期ス

一、本化門下各派ノ編案相提携シテ布教興學ヲ圖ル事

一、各派協同シテ共立大學林ヲ東京ニ設置スル事

一、各派協同シテ共立大圖書館ヲ東京ニ設立スル事

一、各派協同シテ布教團體ヲ組織スル事

一、大會出席者中ヨリ評議員二十名ヲ推選シテ前各項ノ設計及

其他ノ方法ヲ委任スル事

五、諸經費ハ總ベテ門下編案ノ義助ニ據ルコト

六、懇親會出席者ハ義助金勸募ニ盡力スルコト

七、以上ノ各項ヲ遂行センガ爲懇親會出席者中ヨリ

準備委員數十名ヲ推薦シテ委任スルコト

八、各派知名ノ先輩數名ヲ推薦シテ顧問ヲ囑托スル

以上

原案委員中川觀秀は各項に就て明細なる説明を爲し以て來會者の意見を問ひしに甲論乙議盛に各自の腹案を語り合ひしも畢竟小異の争のみにて大々の壯舉を企て、紀念大會を營々んとの大同意は定まりしを以て巨細は委員を選で委任することに決し直に座長より

山根顯道 松井義光 黒澤日明 大野宜輪 米田稔

外國より歸朝せられしドクトル武見可實君は海外在住中の所感を述べて宗運徽々の悲境を按じ暮せし情想を吐かるゝや滿座竊かに聲を殺して鼻汁を嘔り滿目漸くしらせんとするや快活男子金光重彌君破鐘の大音を揚て滿場の熱耳を醒し活氣再び滿ち渡り拍手大喝采の裏に薄暮に及びければ山川智應君の發聲にて 天皇陛下萬歲 聖祖門下萬歲 來會諸君萬歲を三唱し午後五時半頃全く散會せり

▲開宗紀念大會事務所 は日本橋小傳馬町祖師堂内に置くことに定められ常務委員中より常務員を置き諸般の事務を處理することを囑托せらるゝ等なり

▲大會第一準備委員會 は本月一日正午より同事務所に開會せられたり來會者は顧問田中智學先生本多島田江上の三僧正及び濱久保田伊東三顧問の代理者米田稔靜加藤文雅松井義光師を始として山川智應中川觀秀石川正順井村恂也小島傳次郎山根顯道花房日秀今成乾隨加藤文雅溝口太連鷺塚清次郎井口善叔米田稔靜松井義光小倉豊三郎氏等の各準備委員及び補助として吉岡智磨君の二十二名なりき衆議の推薦にて島田僧正座長席に若き田中顧問は個人として意見提出せられ廿八日大會の協定案に基きて若々主張を述べられ種々討議の結

靜 井口善叔 井村恂也 加藤文雅 秋山文明 石川正順 飛田顯哲 小倉豊三郎 鷺塚清次郎 小嶋傳次郎 中原福藏 山川智應 川合芳次郎 神田八講 東京十講全八講惣代各一名

の二十名を指名せられ尋て後に又 關田養叔 中川觀秀 今成乾隨 花房日秀 溝口泰運 景山佳雄 青木英雲 小笠原日毅 柴田日珠 末崎快存

の十名を指名委任せられ終て一同より顧問として

島田養惇僧正 本多日生僧正 江上勝義僧正 伊東日規僧正 田中智學先生

を推舉し後ち又

濱日連大僧正 久保田日龜大僧正

と推舉し依頼する事と定め拍手大喝采の間に方案は協定せられたり次に菓子辨當正宗派等は一同に配布せられ器々器々たりし大論場は忽ち噓々噓然たる團樂のパラタイスとは變化せり食ふ者飲む者喋べる者は宗門未曾有の大懇親會のこととて皆々塵情俗想を打ち忘れ聖訓の眞の異体同心の大理想を實現したるの觀ありき談笑漸く熱し議論隔々に起るの時前の徳島日々新聞記者小倉豊三郎君は起て慷慨の大氣焰を飛ばし續て観近

果左の各項を定めたり(廿八日方案の修正に注意せらるべし)

一、施本 御妙判(如説修行抄)を拔奉して充つる事

一、紀念式 四月二十一日午前中

一、紀念正式 四月二十八日午前中

一、大演説會 四月二十一日、二十八日午後晝夜共

一、會場 上野公園若くは大劇場の中を擇ぶ事

一、大衆傳道 本部常宿所を事務所内に置き二十二

日より二十七日まで六日間各派より選抜編成し

たる布教隊の布教員は起臥飲食を共にし布教中

は僧俗共に正服を着装し威儀嚴肅にして手に玄

題旗を携へ常唱題目して市内各所に説法する事

夜分は本部に於て演説幻燈等を行ふ

一、懇親大會 四月二十九日に開き方案規定事項を

協議する事

一、諸本山及宗廟 委員を選び歴訪して協賛を請ふ

事

一、報道機關 をば「日宗新報」に依頼し諸般の報道

をば敏速に通く廣布せしむる事

一、萬燈及稚兒 祝典莊嚴の爲め十全の方法を以て

一、準備會 本會は中央準備會と稱し地方に於て同主義の運動を爲す團體あれば之を他方準備會と稱し互に氣脈を通ずる事

一、中央準備會 以毎月一回第一日曜午前より例會を開き緊要の會合は臨時會を開く事

一、常置委員 五名とし座長より指名して左の通りに確定せり

松井義光 井村恂也 中川觀秀 小倉豊三郎 齋塚清次郎

一、常置事務委員 一名は常置委員中より互撰にて定む事

一、委員 講社及稚兒係 黒澤日明 米田穩靜 松井義光 小笠原日毅

本山及空應係 加藤文雄 飛田圓哲 會場係 山根顯道 川合芳次郎 齋塚清次郎 中原福藏

一、準備委員 は約數十名増加する事

一、協賛員 を全國に求むる事

一、宣言書 二月中に起草して全國に頒布する事

一、諸經費 常置委員の調査に一任する事

開宗第六百五十年紀念大會に關する議決事項

一 四月二十一日午前 紀念序式

一 四月二十八日午前 紀念正式

一 四月二十一、二十八日午後(晝夜) 大演說會

一 四月二十二日ヨリ二十七日マデ六日間大舉傳道街頭演說及ヒ施本布教ヲ行フ

一 四月二十九日全國宗徒大會ヲ開キ宗門緊要ノ紀念事業ノ企劃ヲ爲ス

(詳細は「日宗新報」を御覽を乞ふ)

謹啓愈々御清程之條奉慶賀候扱て這回聖祖門下の緇素相謀り本年四月を期し開宗第六百五十年紀念大會舉行の計劃相熟し候事は既に新聞紙上及雜誌等に依り御承知の御事と存し候

斯の聖業たる單に在京及近接府縣の有志緇素の企劃經營に止むるは我々の本意に無之候荷も紀念大會を舉行する以上は我祖門下の一大事業として否な宗門の大々的活動事業として最も盛大に最も嚴肅に執行致度素懐に御座候

仰ひて六百五十年の往昔を追懐し俯して現下の状態に類みれば我宗門に於ける意氣の銷沈せること實に驚く

等を決議し午後七時半全く散會せり

▲中央と地方との聯結 其後常置委員は月の五日十一日の兩度、事務所に會合して諸般の事務に執筆し不取敢左の推撰狀に顧問の副書を添加して、夫々各地方へ數百通の發送を舉りたるよし、尙ほ來る廿三日は午前十時より臨時委員會を開催して着々事務の進捗を圖る筈なりとぞ、

拜啓益々御清適奉慶賀候扱て去る一月二十八日東京兩國井生村樓に於て 聖祖門下緇素相會し、開宗第六百五十年紀念大會舉行の件に付左記の通り協定致候然れば這般の舉たる宗門稀有の美事と存候得者全國宗門の緇素一致共同し中央東都に於て盛大に執行致度存意に御座候就ては貴下を本會(協賛員準備委員)に推薦申上候間爲宗御承諾被下候 精々御助勢を賜はり度奉悃願候 早々敬具

追て宣言書發表の都合も有之候に付折返し何分の御沙汰之時は御承諾被下候事と相認め御尊名投載可仕候

明治三十五年二月十一日 東京市日本橋區小傳馬町祖師室内 開宗第六百五十年 紀念大會事務所

に堪へたる次第に御座候沈思瞑目彼此を聯想すれば宗門及國家の前途に就て轉た關心すべきもの尠なからずと存候茲を以て本年の紀念大會を好機とし緇素協力、内外の耳目を刷新し聖祖の御威徳に依り開宗當年の意氣と氣魄を回復し從來隠没せる主義を發展すると同時に大聖人の御理想を現實にし以て報恩謝徳の萬一に酬ひ奉りたき微志に御座候

要するに這回の紀念大會は前に略陳したるが如き趣旨と目的を以て發金せられしものに候得ば貴下に於ても爲宗門將た爲國家御協賛ありて一入御助力の程切望の至に不堪候右特に御依頼申上候 早々敬具

明治三十五年二月十一日 開宗第六百五十年紀念大會

願 伊東 日規 濱 日蓮 本多 日生

臨田 堯惇 田邊 善知 田中 智學

問 久保田日龜 江上 勝義

◎佛記符合佛敎大演說會 以月の二日午後一時より江東伊勢平樓に於て、中原福藏氏獨力開催せられたる事なるが、聽衆滿室拍手に促されて例刻より開教、秘傳事成師の開會の趣旨に次て、信徒増田、高崎、小島、中原諸氏の隨力演說あり、聽て佛記の符合)小林老紳

四十三

(あ、) 懺悔の時機なるかな) 田邊善知師(統一主義の佛教) 本多日生師順次登壇、小林老師の勸持品二十行の偈と宗祖一代の芳躅と比照して、諄々として佛記の符合を論道せられたる。田邊師の勸普賢經の五悔を提唱して、開宗六百五十年に達着せる日蓮門徒の大懺悔を絶叫せる、本多師の法華本迹開顯の妙旨を廣演して宇宙統一の大論目を喝破せる、何れ劣らぬ大梵音、人をして覺へず信伏の域に到らしめ、黄昏芽出度閉會したりける。

◎本尊抄懸賞論文募集 日比野師の該事業は着々進捗しつゝあり、但し募集期限は三月十日迄、喜捨の期限は四月八日迄、何れも延期の止むを得ざるものありとぞ通報ありたり

●同盟雜誌社及宗友會の會合 同盟會の第六回宗友會第四回の會合は、一月三日鎌倉栗山に於て開會せられたる事、前號所載の如く、さて宗友會の問題「勸誘の可否」は其節合評のみにて委員附託となり討論には移らざりしが、本月十一日池上日宗社に於て其第五回會合(同盟會は第七回)を催はしたり、會するもの十數名例によりて委員の報告あり、可論委員加藤文雅師(代中村孝啓師)の別動語は可なりとの取調報告に次て、非

らん事こそ望まじけれ、三河野田の法華寺ころは、數百年前の開創にて傾頹破砕甚しく、任職西山日諭師復興の志ありて、而も身布教員の重責に日夜の奔走、空しく嘆嘆の聲を吞まれしが、前任石塚日縁師見るに見かねて老餘の勇を鼓し、一昨卅三年十一月始めて其回復を企畫して、滿一年の備風沐雨、費額數千金、殆んど改築に等しき大工事も督勵其宜しきを得て、昨年十月芽出度其工を畢へ、同月十四日より十六日迄三日間盛大なる開堂入佛會を修せられしとぞ、なんばふ嬉しき事ならずや、今其入佛會の際大導師牧田大僧正の唱臨にかゝる語文を掲げて、其概況を想見せしめん、こと山々なれども、紙面の都合により之を略しぬ、因みに當該管事よりは狀を具して、兩帥の功勞を宗務廳に上申し、宗廳亦褒狀を下賜せられたりとぞ、

●夏期講義録出版せり

田邊 善 知

余は日宗の統一上妨害にならんこと、しあらば何事に限らず忍びまらざる決心なりき、されど、夏期講義録出版に就てはあまりといへば不都合のきはみなり。左に箇條をならべて關係者の猛省を促す。

論委員山川智應氏の別動語絶待排斥の取調報告あり、舉て討論に移り田邊善知師の奮然として中村師の論議を喝破せるに次で、否論者本田日生師の第一約宗教分類、第二約行門、第三約教旨、第四約本尊實跡、第五約立宗綱領、第六約宗旨離合、第七約冥福思想、其八約祖判實義の八綱目十六分類の大論道、田中智學居士の暫らく練磨の爲め番外として可論を主張せられたる前後五時間餘に渉れる非常の大論戰、議論未だ盡きずして日既に没せるをもて、次回に於て重て大に論議することを約して散會しぬ、尤も此論題は宗家隆否に大關係ある實際問題なれば、増田聖道師をして悉く速記せしめ本會文庫の裡に永く保存し、他日期を得て之を世に公表することあるべし、因みに次回よりは便宜上會合場所を小傳馬町祖師堂と確定したり、來月の會合日は確定次第日宗新報に之を披露せん、

●道場復興 徒らに寺門の莊麗をのみ欲して、檀信徒信條の不充足なるは、多蓋塔寺の往昔は兎も角、闕諍堅固の末法今時に不應爲の行作なるが、去り連闕教度生の道場を、其頹廢に委ねて顧みざるが如き、是れ亦有道の法師にあるまじき事、要は任職其人の護法志念を兩方面に全からしめて、有形無形雨ながら澆潤たればへり

- (一) 余の講義は中川君の筆記を一夜にて閲讀し教義に關する部分丈を修正して客歲八月中川君へ渡せり、これ出版をいろいろと文飾は本職にかくることなればへり
- (二) 本多師の講義も三日間の期限に修正せよとの注文にて客歲九月秋葉君に渡したり、これまた出版をいろいろと同師の分が一番遅延せりとの口實の爲めなり
- (三) 各講師出演時間は田中居士十時間、本多師六時間、中村師四時間、小生は八時間、而して課題の満講を告げしは小生一人なり、然るに出版講義を見るに「祖書研究」五二頁「別頭教觀」三六頁「私考」三二「攝折論」二七二頁なり、何んたる不公平なるぞ。
- (四) 講義は十月出版の豫定なりき、然に十一月は愚か十二月に至るも發行せず、この間何等かの事情なかるべからず、これ余が客歲八月紙數制限の標準と文飾の統一と校正の方法とを橘香會へ照會すると同時に不平均の懸あらば余の講義掲載拒絶を申込みり、
- (五) うの後中川君の來訪により田中居士一人の爲に出版の延滞、講義の不統一になりしを聞知せり、余は之を聞き日宗統一の爲且つ共同事業の性質として講義不統一の非を鳴らし再在中川君の答辨を約して別る

(六) 其後加藤文雅師よりも二回の書狀一回の面談ありしも掲載拒絶以前の如くなりき。

(七) 客臘二十八日花房君より講録製本済との書狀来る余りの不都合を詰責したる書狀を送れり。

(八) 一月二十三日出版講録一冊は橘香會より郵送せり之を披閱するに不統一不公平實に言語同斷の振舞なり。

右の事實を錯綜し來らば(1) 出版遅延の罪(2) 稿本編成不公平の罪(3) 拒絶講録掲載の罪(4) 編輯主任違約の罪(5) 講師の一人が講録と著作とを混視したる罪(6) 講録面にあらはれたる諸種僭越の罪は三講師の紙數合して百二十頁、一講師の紙數二百七十二頁なるによつても明かなり
余は日宗統一の爲に各講師とは言はず、又橘香會員とは言はず、只功名心に驅られて大事を破壊する勿れと告ぐるあるのみ

◎別格本山妙立寺方丈の再建 遠州吉美の延兼山妙立寺とし云へば、開祖日什大正師發軔の大道場にして由緒正しき宗門稀有の靈場なることは今更申すも愚かの事なるが、去る廿九年十二月廿九日不慮の祝融に罹

廣 告

鑛毒被害民救済義金募集の概

嗚呼足尾銅山鑛毒被害民の慘狀吾人豈に之れを言ふに忍びんや、
惟ふに足尾銅山採鑛製銅の業起りてより茲に二十年、毒屑毒水日に月に渡良瀬河に注ぎ、毒流滔々遂に沿岸一帯數十里の地に浸襲し、群馬栃木埼玉千葉各縣數十萬の生靈悉く其の害を蒙る、田園之れが爲めに荒廢し魚介之れが爲めに斃死し、沿岸無量の殖産は、擧げて流毒の奪ふ所となり、壯丁業を失ひ、老幼飢に泣き一家産を傾け、兄弟妻子四方に流離困頓す、加之、毒屑今や是等窮民の髮膚を蝕し、孕婦は流産し、幼弱は夭折し、壯老空しく病軀を擁して呻吟す、嗚呼我同胞たる幾十萬の民は、住むに家なく、纏ふに衣なく、喰ふに食なく、病に醫藥を得ず、渡良瀬河畔、啼鴉枯木に悲み滿目荒塚たるの邊、仰て寒天に號び伏して凍地に泣くあるのみ、眞に是れ人生の大慘事、一び之を目睹耳聞するもの、誰れか涕淚泣然として襟袖を濡ぼすを禁すべけんや、

り、方丈客殿庫裡等悉く烏有に歸し去り、爾來數星霜空しく詣者をして嗟嘆の聲を吞めしめしが、現住牧田日禪大僧正六十七歳の頽齡を以てして、苦辛慘憺漸くうが再築を企畫し、昨年十二月より工を起し目下數十人の職工人夫孜孜として其工を急ぎ居れば、略ぼ本年秋初の頃迄には落成の見込みなるよし、最も時節柄從前の面目に回ることば及びもつかぬよしなれども、方丈客殿廊下物置井戸其他附屬建物等隨分多額の費目を要すべく、老師は殆んど寢食をも忘れ晝夜服引掛けにて、工事を監視せられつゝありとぞ、聞くがまゝをかくなん

おこどわり

小林日至老師の『法華隨に就て』の一文は團報部にて紛失、色々搜索して漸く見出したれども、既に本號組立後にて間に合はず、次號に必ず掲載すべし、窪田孤松子の『日蓮上人と東條景信』下編、國友如淡居士追吊文等亦編輯の都合により、次號に掲載することゝなし以請諒焉、(編者白す)



妙法蓮華に經云く「我亦爲三世父、救諸苦思者」と、吾人は茲に佛祖大慈悲の遺訓を奉じ、鑛毒被害民救済會を設立す、冀くは以て廣く天下人衆の同情を喚起し、併せて鑛毒被害民の窮苦を救はんと欲す、嗚呼仁慈博愛の情に富める御法の友よ兄弟姉妹よ、吾人の微志を贊し、此の憐むべき幾十萬無告の生靈の爲めに、飲食の一端を割き、以て應分の義財を寄與せられんことを、敢て概す、

明治三十五年一月十五日

東京市淺草區北清嶋地十四番地常林寺内

鑛毒被害民救済會

- | | | | | |
|-----|---|---|---|---|
| 發起人 | 今 | 成 | 乾 | 隨 |
| 全 | 關 | 田 | 養 | 叔 |
| 全 | 飛 | 田 | 養 | 叔 |
| 全 | 井 | 口 | 善 | 哲 |
| 全 | 井 | 村 | 善 | 叔 |
| 全 | 井 | 村 | 善 | 叔 |

義金募集略則

- 一 義金は東京市淺草區北清嶋町十四番地常林寺内鑛毒被害民救済會發起人關田養叔宛送附あるべし
- 一 義金寄與者に對しては其芳名を統一團報紙上に載せ感謝の意を表するを以て別に領収證を發せず
- 一 募集したる義金は更に一括し適當なる方法を以て被害地窮民に送與するの手續を爲すべし

廣告

月刊 佛敎

毎月一回五日發行
 一冊金十錢六ヶ
 月前金五十五錢
 一ヶ年金壹圓

(第十八年第一號は二月一日大改良を加へて發行せり)
 ●本誌は高等寺院佛敎有志家及び各學校生徒諸君に依つて愛讀せられ敎界に大勢力を有するもの也
 ●本誌は各宗に通じて愛讀せられ又各宗に向つて忌憚なく論評をなす故に敎界中尤も建全の雜誌なり
 ●本誌は發刊以來常に佛敎界の指導を以て任じて今日迄息む時なし敎界雜誌中の先驅なり
 ●本誌は佛敎研究佛敎史研究及び各宗敎育制度に對する評論をなし開祖高僧等の史傳研究には尤も力を盡す
 ●實際問題には僧侶の生活問題妻帯問題僧臘改良各宗政治等々付き熱心之を論評す
 ●新刊紹介雜報敎信等も大に力を盡し又名家訪問録を掲ぐ
 ●英文佛敎史摩訶ばんぎ及び譯文は來る三月より掲載せらる敢て佛敎家の愛讀を乞ふ

東京淺草新谷町十 佛敎社

(電話浪花一千二百六十三番)
 大賣捌東京堂 ● 東海堂 ● 文明堂 ● 北隆館 ● 鴻盟社珠水屋 ● 森江本店 ● 全支店 ● 其中堂 ● 光融館

廣告

主筆 田中智學居士

妙宗

毎月一回(六日)
 每號大附錄附發行
 所相模鎌倉要山師
 子王文庫
 定價一部金十錢
 (附録共)郵税金一
 錢壹ヶ年前金壹圓
 貳拾錢 不要郵稅

送金は師子王文庫宛鎌倉局振込の事
 二月六日「第五編」第二號「既刊」

主筆 加藤文雅

日宗新報

毎月三回(八の日)
 發行所武藏
 池上日宗新報社
 定信一部金五錢
 十八冊(半年分)
 八十五錢、卅六冊
 (壹年分)壹圓六十
 五錢、一切前金の事、送金は池上郵便受取所
 へ振込み「日宗新報主任加藤文雅」に御指定の
 事、一月八日「創立第八百三十三輯」革新第二百廿
 七輯「既刊」

廣告

來ル三月八日午前第十時淺草區北清嶋町常林寺大學林同窓會本部ニ於テ故櫛間本慶君の一週忌法會相營ミ候ニ付此段生前辱知諸師へ謹告仕候

追テ御列席ノ諸師及ビ吊詞等御越シノ御方ハ時刻ニ相違無之様願度候

明治三十五年二月

大學林同窓會

幹事 鈴木孝碩
 前田孝信

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
 一本誌は一冊五錢十二冊前金五十七錢廿四冊前金一圓八錢郵券代用は一割増但五厘切手に限一講讀申込の節は住所姓名を附書にて認むべし一爲替は武藏國品川郵便局へ向け御振り込の事一本圓は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし一廣告料は五號活字廿四字詰每一行金七錢なり

明治卅五年二月十五日印刷發行

發行所 東京府荏原郡品川町元南品川四百十二番地

發行所 統一團團報部

編輯人 本多日生
 印刷人 山根顯道
 鈴木障學

統一團報

第八十三號

日蓮上人の慈誨(接前)……聖應院
 (9) 彩色に影なきが如し (10) 黒日分明
 (11) 推、理、覺 (12) 耳根得道
 (13) 調、其、表、態 (14) 日蓮の嗣
 南無の義解……………信 唱 院
 小僧の愛嬌 南無の原語 南無の字義
 壽命の取引 迷子の三太 自慢高慢馬鹿の内
 誠諦之語 本門の三寶
 一大事……………妙光道人説教
 人間各々希望なり 希望目的は箇々別々也
 人生共通の一大事 死活問題
 人間の本能 笑顔惡形
 常樂院日經上人(接前)……野口義禪

經鉢無間論の批評(如法修行抄に就て)……熱心生

一抄通不通の失 禁誡に背く失

方便を顛倒する失 當文僻辭の失

祖聖日蓮と東條景信(下)……窪田純榮

——五箇上人——

みどりの、た、り……………松尾 忍水

故國友知派居士の吊文……………數 通

感阿連信……………小山 理介

宗友會第五回の會合、顯正會の宗祖降誕會、

弘道所の開山會、青森歩兵第五聯隊凍死者追悼會、

論文彙集に就て